QUALITY ASSURANCE
JIC
REGISTERED
ORGANIZATION
No.0430-ISO9001
ISO9001認証取得

molten®
INNER FIRE

2005年度始動
普及、育成、強化、そして北京へ

(財)日本ハンドボール協会会長　渡邉 佳英

北京オリンピックへの挑戦は、すでに始まっています。アテネ出場を逃した悔しさをバネに、謙虚に反省すべきところは反省をし、新たな道筋をつけていかなければいけません。協会としても20年ぶりのオリンピック出場を果たすため、日本ハンドボール界の至宝である蒲生晴明氏を強化本部長に就け、大いに腕を振るっていただくため、協会も強力にバックアップしていきます。もちろん協会だけでは目標を達成することはできませんので、日本リーグ企業、JOCをはじめ、「がんばれハンドボール10万人会」の皆様にも幅広くご支援いただくことが不可欠です。

オリンピック出場は、長年の課題であるハンドボール界全体の底上げに、最も早くつながると考えています。オリンピックの舞台で活躍することができれば、日本国民に感動を与え、多くの少年少女が、明日のオリンピック選手を目指すことでしょう。また、選手以外についてもハンドボール競技のスピード、激しさ、戦略性といったものに魅了された観衆が増えれば、実際に競技会場へ足を運んでいただけると思います。

そこで、2005年度の活動については次のように考えています。

1. 現在進めているプロジェクト21構造改革を強力に推進し、将来に渡って強化と普及の土台を築きます。

2. 協会の諸事業を三つの事業※に連動し、効率的に予算化します。また、マーケティング事業による収入の増大や協賛金の獲得、登録制度の見直しによって財源の確保をします。

3. ハンドボールをする人や見る人を育成するとともに、ハンドボール競技そのものを支え、運営していく次代を背負う人材の育成をします。

また、長期的な強化策はNTS(ナショナル・トレーニング・システム)を中心として活動をしていきます。小さい頃から学校教育やクラブを通じてハンドボールに親しんでもらい、小学生・中学生・高校生と成長していくそれぞれの段階で、いかに有望な選手を探し出し、効果的な指導を行うかが重要です。そして、目標は常に世界です。それぞれ若い頃より世界の舞台を経験して、世界のレベルを肌で感じることができれば、世界の一流選手を相手にしても気おくれすることなく、自分の本来の力を発揮することができるでしょう。

実際、ジュニアはもとより、小学生も韓国との交流試合を行っています。世界を意識しながら育った子供たちが、どんなプレーを見せてくれるか大変楽しみです。

※三つの事業とは、オリンピックプロジェクト、NTS、ジュニア3000プロジェクト

平成17年度 事業計画

平成17年4月1日　（財）日本ハンドボール協会

1. 普及･指導に関する事業

≪普及関係≫

【基本方針】

1. 普及委員会
　①普及プロジェクト21推進会議の設置
　・ブロック会議
　　少年チームの実態、創設の方法、指導者育成、ネットワークの構築
　②公認指導者体系の整備
　③普及施策の検討
　・U-15対策会議（中学生大会実施検討）
　・地区大会･交流会の開催
　・異種目スポーツとの連携事業
2. 小学生専門委員会
　①小学生を中心としたジュニアチームの育成
　・市町村協会でのスポーツ教室、スポーツクラブの育成
　・郡市町村ハンドボール協会の設立、促進
　・チーム登録の徹底
3. 学校体育ハンドボール検討専門委員会
　①指導要領対策
　②小学校における教科体育ハンドボール授業の実践推進
　③小･中･高の教科体育における一貫指導体系の確立
4. 中学生専門委員会
　①チーム登録の徹底
　②指導者養成、チーム育成事業の充実
5. 生涯ハンドボール体系の確立
　①ビーチハンドボールの普及
　・全国大会の開催
　②マスターズハンドボールの普及
　③車椅子ハンドボール等の支援
6. 女性委員会（プロジェクト）
　①女性指導者の把握を目的として、平成17年度協会登録チームを対象に質問紙調査を実施する。
　②アンケートを集計、結果のフィードバックは都道府県協会女性委員会担当窓口宛。
　③普及・育成の観点から今後の活動計画を決定する。

【重点施策】

1. 小学生チームの運営研究
　・小学生専門委員会を中心としてスポーツ教室、クラブチーム、ブロック･都道府県における小学生チームの組織化
　・ブロック大会の充実
　・大会運営方法の検討
2. 小学校教科ハンドボールの普及と次期指導要領改訂対策
　・実践研究発表会の充実（第1期〔平成15、16年度〕実践19校報告）
　・研究指定校制度の継続、報告書のまとめ
　・発育発達に応じた指導マニュアルの作成
3. 中学生チームの普及と活性化
　・全国中学生大会の実施
　・（財）日本中学校体育連盟との連携
　・NTSとの連携
4. 生涯ハンドボール体系への基盤整備
　・少年スポーツ教室･クラブの充実･マスターズ大会の充実
5. ビーチハンドボールの普及
　・講習会の開催、審判員の養成

≪指導関係≫

【基本方針】

1. 指導者の育成
　①指導組織の整備
　②都道府県における日本協会公認J級指導員及び（財）日本体育協会公認ハンドボール指導員の養成
　③コーチレフェリーシンポジウムの開催
　④大学における（財）日本体育協会公認ハンドボールコーチ専門科目認定コースの設置について
　⑤講習会講師の育成と組織整備
2. 公認指導者の義務づけについて
3. 海外派遣による研修と情報収集
4. 技術･指導情報の広報
5. NTSとの連携

【重点施策】

1. 日本協会公認J級指導員養成、（財）日本体育協会公認ハンドボール指導員養成講習会の実施
　・U-19までの指導体系の確立
2. コーチシンポジウムの開催
　・上級指導者養成
3. 公認指導者組織の整備
　・各ブロック･都道府県における研修体系の確立
4. NTSとの連携

2. 競技運営に関する事業

【基本方針】

1. 日本協会主催、共催大会及び国際大会の管理運営にあたる。
2. 大会運営、競技運営の組織化を具体化する。
3. 大会システムの再編を図る。
4. 競技用具検定制度の推進及び整備を図る。
5. 国民体育大会の活性化、簡素化、効率化の推進を図る。

【重点施策】

1. 各加盟団体の競技委員会組織の確立と組織的運営にあたる。
2. 大会運営、競技運営の組織化を図るためにも競技役員の資質向上をめざし、養成を図るとともに、運営の普遍化を具体化する。
3. ジャパンオープントーナメント、年令別大会の組織化を図る。
4. 競技用具の検定制度の推進及び整備を図るとともに、大会における検定･公認用具、検定･公認備品使用の徹底を図る。
5. 国民体育大会に関する諸問題を整理検討する。
6. 競技運営マニュアル平成17・18年度版の発行

3. 国際に関する事業

【基本方針】

1. 世界大会出場時の支援（連絡・交渉・情報収集など）
2. 国際ハンドボール連盟への貢献
3. アジアハンドボール連盟への貢献
4. 東アジアハンドボール連盟への支援

【重点施策】

1. （財）日本ハンドボール協会の国際的地位向上
　・IHFの役員、委員となる環境を整えるため、IHF開催の大会、会議等に国際委員を派遣（年間2回又は2名）する。
　・AHF･EAHFの役員､委員としてAHF･EAHF開催の大会、会議等に国際委員を派遣（年間2回又は2名）する。
　・国際会議・大会等で各国代表等と交流し、日本に対する理解を深める。
2. 外国の情報を収集
　・試合ビデオなどの各国情報を収集する。
　・国･地域などで開催される大会などの情報を入手する。
　・西欧・東欧・北欧・アフリカ・中近東・東アジアの情報収集のための拠点（JICA、現地日本人会との連携）を作る。
3. 東アジア地区の連携強化
　・競技会実施のための支援

・コーチ・レフェリー研修会等の支援
4. 国際大会、海外交流の支援
・国際大会出場チーム、海外派遣選手の支援
・国際会議、研修会等の派遣役員の支援

4. 競技規則（審判）に関する事業

【基本方針】
1. 審判員の資質の向上
日本のハンドボール技術向上は、審判員の技術向上があって実現する。トップレフェリーを含め全体のレベルアップを図る。
このためには、コーチ及びプレーヤーとコミュニケーションを図る必要があり、トップレフェリー研修会に多くのコーチの参加を促し、その実現を図る。
2. 競技規則運用の精度を高める
競技規則改正年度にあたり、8月1日施行に向けての伝達の徹底を図るため、審判合同会議・全国審判長会議等での伝達、また競技規則運用面での問題の吸い上げをはかり、国内外での大会に支障のない状態を作る。
3. 審判員の評価活動
研修会・講習会の成果確認と新たな課題の把握・評価を行うため、審判員審査指導委員を多くの大会に派遣し、現状の指導ポイント課題を探る。
【重点施策】
1. 視聴覚教材の充実
審判員の資質向上を図る有効手段として、VTR・DVD等の視聴覚を駆使することは最も有効手段と考える。そのため機材の充実とスタッフの充実を図り、全国からの問題映像を編集し見解を統一していく。
2. NTSとタイアップした講習会の充実
全国大会担当審判員、日本リーグ担当審判員及び技術指導者を一堂に集めた従来のトップレフェリー研修会の継続と、NTSブロックトレーニングとタイアップしたB～D級を中心とするブロック審判講習会を実施し、反則と技術の研究を深めるとともに、底辺から審判技術の向上を図る。
3. 継続的行事の実施
都道府県協会認定のD級、ブロック協会認定のC級、日本協会認定のA・B級審判審査、審判員評価、JHAレフェリーコース、審判部合同会議のあり方を充実させ、審判部運営の充実を図る。

5. 競技力向上（強化）に関する事業

【基本方針】
セクションを越えた協力体制で北京オリンピック出場
北京オリンピック出場のための強化施策立案と同時に、日本ハンドボール協会の強化に関して「構造改革」を実施する。したがって、NTSをシステムとした「発掘・育成・強化・指導」について、競技者育成技術委員会を調整機関として、各委員会とセクションを越えた協力体制をとって、将来にわたりオリンピック・世界選手権に出場できる体制を構築していく。
【重点施策】
1. 北京オリンピック出場のための代表チーム強化施策
・国際試合の実施
・外国人コーチ招聘による強化指導
2. 少数精鋭と重点強化体制の確立
・強化合宿参加人数を少数とし重点的に強化する。
3. 年齢カテゴリー別の体制確立
・NTSと連携して各カテゴリーの年齢別代表チームを少数精鋭メンバーで構成し、強化合宿回数を増加する。
・代表チームをはじめ指導スタッフは、コーチのいるチームとする。
4. エリートスタッフ養成体制確立
・強化委員会にエリートスタッフ養成部会を設置する。
・将来の代表チームスタッフ・テクニカルスタッフ・トップレフェリーを各委員会と連携して、重点的に育成していく。
5. 日本リーグチームとの連携強化
・代表チームと日本リーグチームとの連携を図り、常に北京を目指せる強化を図る中で、トップコーチを育成していく。
・プロ化検討プロジェクトを設置し、検討する。
6. 情報・科学委員会のサポート
・従来の医科学専門委員会を医事専門委員会と情報科学専門委員会に分ける。
・医事専門委員会は強化本部に設置し、ドクター派遣とドーピングを実施する。
・情報科学専門委員会は、分析研究を行い代表チームのサポート等を実施する。
7. 収益事業の展開
・代表チームを柱とした収益事業を展開し、強化費の確保を実施する。

6. 機関誌発行に関する事業

【基本方針】
機関誌を通じ、日本協会全体の情報を共有化し、全国のハンドボール関係者の意識統一を図り、ハンドボール界の発展に寄与する。
【重点施策】
1. インターネット情報との連携を図り、記事を掲載する。
2. 年10回の発行とする。
3.「機関誌のあり方」を検討する（インターネット化）。
4. ナショナル情報・協会便り・理事会報告・国際情勢・各委員会・各連盟・NTS情報・IHFニュース・企画記事他を掲載する。

7. 企画・広報に関する事業

≪企画事業≫
【基本方針】
1. 北京オリンピック出場を踏まえた取り組みを企画する。
2. 中・長期スケジュールに基づく企画立案を行う。
3. マーケティング事業に関する定着・拡大を図る。
4.「プロジェクト21」の推進を行う。
5. 協会運営の改革を検討する。
【重点施策】
1. 北京オリンピックにむけての具体案の策定と実行
2. マーケティング委員会並びに協賛募金活動の具体化
3.「プロジェクト21」の具体的推進
4. 協会運営の改革に取り組み
5. 中・長期スケジュールに基づくナショナル強化・競技力向上・普及・国際行事等の立案
≪広報事業≫
【基本方針】
1. ハンドボール情報の発信の拡大を図る。
2. マスコミとの交流の拡大を図る。
3. 協会内広報体制の充実を図る。
4. インターネットの充実拡大を図る。
5. ナショナルチームのPRを図る。
6.「がんばれ10万人会」の徹底を図る。
【重点施策】
1. 年間活動計画の作成を行い、実施する。
2. 発信媒体の拡大に伴う対応
・新聞・テレビ（地上波・BS・ケーブル）・雑誌・インターネット
3. ホームページの充実
4. マスコミとの定期懇談会
・東京記者クラブとの懇談会
・NHKとの懇談

5. 協会内組織の充実（担当者の複数化・役割分担）
6. ナショナルチーム露出
   ・記者発表・記者会見
   ・新聞・テレビ・雑誌・ホームページ
7. ホームページ情報の内容充実
   （機関誌委員会・インターネット委員会・スポーツイベントとの連携）

≪インターネット≫

【基本方針】

平成16年度は、協会独自のサーバを立ち上げてから7年目となり、情報発信に対するユーザの認知度等、前年に比較し、効果が認められている。その反面、人材面の不足等から発信内容が固定化される傾向にあり、新たな情報発信・円滑な運用のための体制づくりを進めていく必要がある。

平成17年度においては、インターネットを活用した情報提供のさらなる充実を図り、日本協会より発信すべきハンドボールの情報を、一般の愛好者、関係者へタイムリーに発信する。

【重点施策】

1. 日本協会ホームページの充実
   ・試合結果等の情報発信のスピードアップと内容の充実
   ・新たな情報発信方法の検討と試行
   ・日本協会の広報活動としてのホームページ活用
2. ホームページ等、円滑な運用のための体制づくり
   ・より良いシステムの検討、人材の補強等
3. 外注化による作業の効率化
   ・ホームページ作成作業の一部を外部に委託し、作業の効率化をはかる。

8. 財務・会計に関する事業

【基本方針】

平成17年度の日本ハンドボール協会の財政状況を取り巻く環境は、経済的にも社会的にもきびしい状況にあり、平成16年度と同様に予算編成にあたっては縮小均衡を前提に緊縮財政を組まなければならない状態にある。特に、支出面ではこれまでの事業内容をよく検討し、投資効果と費用対効果を充分に精査し、効率の良い運営を推進していく。また、収入面については協会の事業の中でも特化すべき強化・普及の諸事業の円滑な推進のため、マーケティング委員会を中心に積極的な協賛活動の展開と、検定事業等の再検討、さらには、協会運営の原点ともいえる登録金の改定を具現化する。

【重点施策】

1. 各種事業内容を検証し、投資効果の精査とその事業の差別化を図る。
2. 競技運営委員会・マーケティング委員会と連携し検定事業の再検討を含め、強化事業の財源確保のため各種の協賛活動を実施する。
3. 収入財源の安定的確保のための登録制度の改定を今年度に提案し、来年度からの実施に向け教宣活動を行う。

9. 日本リーグに関する事業

【基本方針】

日本リーグを継続・発展する。
・日本リーグ機構の中期ビジョンを検討する。
・地域と共に発展する日本リーグを目指す。
・ナショナルチームの強化支援を行う。
・普及活動への連携支援を行う。
・企業とパートナーシップを図る。

【重点施策】

1. 日本リーグの中期ビジョンを作成する。
2. 新しいリーグの在り方に挑戦する。
   ・日本リーグのシステム改革を行う（男子リーグ・女子リーグの在り方・変革）。
   ・チームにゼネラルマネージャーを設置し、運営を開始する。
   ・開催権料をアップする。
   ・運営組織を簡素化する。
   ・マーケティングに取り組み、成果を上げる。
3. メディア対策を継続・発展させる。
4. 第30回大会の記念行事を実施する。
5. 観客動員の増加を図る。
6. 第3地域での試合開催を拡大する。
7. 経費節減に取り組む。
8. 国際競技力アップに協力する。（ナショナルチーム強化支援・NTSへの協力・支援）
9. 審判技術の向上に取り組む。
10. チャレンジリーグ・オールスター戦の充実を図る。
11. 東アジアクラブ選手権大会の平成18年日本開催準備を行う。
12. トップリーグ連携協議会に参加し、活動を行う。

10. 総務に関する事業

【基本方針】

近年、日本ハンドボール協会の事業は社会情勢と、スポーツを取り巻く環境の変化にともない、多岐にわたる活動を余儀なくされている。当然、活動の執行部門である事務局には専門性・正確性・迅速性等が要求され、現行の事務局のマンパワーからして、仕事量は増加の一途にある。この現況から今年度は、業務の効率化を積極的に推進し、事務局の多能化を実現していく。さらに戦力の強化を図るため、人材の効果的再配置と投資を検討する。また、事務局経費の削減については継続的に取り組み、諸会議の円滑な運営と会議のあり方についても再考していく。また、環境問題がスポーツ界でもクローズアップされており、大会などを通じ今後環境保全の啓蒙活動を行ってゆく。

【重点施策】

1. 事務局の多能化
2. 事務局経費の5％削減
3. 諸会議の再検討
4. 協会規程の修正と発行
5. 環境保全の啓蒙・実践活動
6. 個人情報保護法の遵守

11. マーケティングに関する事業

【基本方針】

ここ数年、企業スポーツの撤退など環境の変化に影響され、大口の協賛金収入は見込めず、相当厳しい状況である。

このような中で、オリンピック出場権獲得を目指してオリンピックプロジェクトが発足された。マーケティング委員会としては、このプロジェクトに積極的に協力体制を取りながら財源の確保に邁進する。

【重点施策】

1. 従来の協賛企業の再フロー活動
2. オリンピックプロジェクトと共同活動による協賛企業の開拓推進
3. オリジナルグッズ委託販売の推進
4. JOCオフィシャルパートナーシップタイアップの推進
5. 日本協会主催大会開催に伴い権料の見直しとシステム構築

12.『がんばれ10万人会』サポート会員に関する事業

【基本方針】

「がんばれハンドボール10万人会」サポート会の規約改正により、サポート会の拡大を推進する。また、日本協会と都道府県協会と連携し、サポート会の組織化を図る。

【重点施策】

1. 都道府県協会サポート会を全国組織にし、本協会会員を10万人にする。
2. 会員への情報・サービスを拡大する。
3. 日本代表選手の家族、OB、OGの組織を作り、サポート会グランド会員への入会を促進する。

平成17年（2005年）度　国内・国際大会日程

	大　会　名	開　催　日　程	開催地	開　催　場　所
4月	第2回東アジアクラブ選手権（男女）	4/7（木）～4/11（月）	中国	大崎電気、広島メイプルレッズ
5月	西日本学生選手権大会	5/28（土）～6/1（水）	福岡県	福岡市民体育館、福岡大学第2記念会堂、アクシオン福岡、福岡市南区体育館、福岡市早良区体育館
6月	第1回アジアユース選手権（WC予選） 男子（U19）女子（U18）	6/26（日）～7/2（土）	タイ	男女ユースが出場 （男子:U19、女子:U18）
	第9回日韓スポーツ交流（派遣/女子）	未定	未定	U16が参加
7月	第25回全国クラブ選手権大会・西 （第61回のじぎく兵庫国体リハーサル）	7/8（金）～7/10（日）	兵庫県	朝来市和田山体育センター、養父市立八鹿総合体育館
	第25回全国クラブ選手権大会・東	7/16（土）～7/18（月）	福島県	本宮町総合体育館・本宮体育館・本宮高等学校体育館
	第7回ワールドゲームズ・ビーチハンドボール	7/21（木）～7/24（日）	ドイツ	
	第10回ヒロシマ国際大会	7/21（木）～7/24（日）	広島県	東区スポーツセンター
	高松宮記念杯第46回全日本実業団選手権大会	7/27（水）～7/31（日）	富山県	富山県総合体育センター、富山市総合体育館
	第13回全日本マスターズ大会	7/29（金）～7/31（日）	大阪府	大阪市立舞洲体育館
	第18回全国小学生大会	7/29（金）～7/31（日）	京都府	京田辺市田辺中央体育館、同志社大学体育館、京都府立田辺高等学校体育館
8月	NTSブロックトレーニング	8月～9月予定	各ブロック	
	第1回男子ユース（U19）世界選手権大会	8/1（月）～8/7（日）	カタール	男子ユース（U19）が出場
	高松宮記念杯第56回全日本高校選手権大会	8/1（月）～8/7（日）	千葉県	佐原市市民体育館、佐原市立佐原小学校体育館、千葉県立佐原白楊高等学校体育館、市川市国府台市民体育館、市川市塩浜市民体育館、千葉商科大学体育館
	第15回女子ジュニア世界選手権（U20）	8/1（月）～8/14（日）	チェコ	女子ジュニア（U20）が出場
	第32回全国高等専門学校選手権大会	8/6（土）、8/7（日）	川崎市	川崎市とどろきアリーナ
	東日本学生選手権大会	8/8（月）～8/11（木）	北海道	函館市民体育館、函館大学体育館
	第10回ジャパンオープントーナメント（男子）	8/13（土）～8/16（火）	兵庫県	神戸市立中央体育館、神戸市総合運動公園「グリーンアリーナ神戸」
	第10回ジャパンオープントーナメント（女子） （第61回のじぎく兵庫国体リハーサル）	8/14（日）～8/16（火）	兵庫県	三田市立駒ヶ谷運動公園総合体育館、三田市立城山公園体育館
	第15回男子ジュニア選手権大会	8/15（月）～8/28（日）	ハンガリー	日本は不出場
	第34回全国中学校大会	8/21（日）～8/24（水）	愛知県	豊橋市総合体育館
	第13回日韓中ジュニア交流大会	8/23（火）～8/29（月）	北海道	高校生　きたえーるサブアリーナ
	第9回日韓スポーツ交流（派遣/男子）	未定	未定	U16
	第9回日韓スポーツ交流（受入/女子）	未定	未定	U16
	第7回全日本ビーチハンドボール選手権大会	8/27（土）、28（日）	千葉県	富浦町原岡海岸
9月	第30回日本リーグ	9/3（土）～3月上旬	全国各地	
10月	第60回国民体育大会	10/22（土）～10/27（木）	岡山県	津山工業高等学校体育館、鏡野町多目的屋内運動場、落合総合公園白梅総合体育館、落合総合公園屋根付きゲートボール場、勝山スポーツ
11月	高松宮記念杯男子48回女子41回全日本学生選手権	11/5（土）～11/9（水）	川崎市	川崎市とどろきアリーナ、あと1会場交渉中
12月	第17回女子世界選手権	12/5（月）～12/18（日）	ロシア	女子ナショナル
	第57回全日本総合選手権大会	12/21（水）～12/25（日）	福井県	福井県営体育館、北陸電力福井体育館フレア
	第14回JOCジュニアオリンピックカップ	12/24（土）～12/27（火）	大阪府	堺市家原大池体育館・金岡体育館
	NTSセンタートレーニング	11月～1月予定	未定	未定
1月				
2月	全日本実業団チャレンジ2006 （第61回のじぎく兵庫国体リハーサル）	2/10（金）～2/12（日）	兵庫県	高砂市総合体育館、加古川市立総合体育館
3月	第30回日本リーグプレーオフ	3/18（土）、19（日）	東京都	駒沢体育館
	第29回全国高校選抜大会	3/22（水）～3/27（月）	東京都	東京体育館、駒沢屋内球技場、駒沢体育館、立教大学体育館
	第1回春の全国中学生選手権大会（仮称）	3/26（日）～3/29（水）	富山県	氷見市ふれあいスポーツセンター、県立氷見高校体育館、県立有磯高校体育館

※[　　　]は国際大会　※上記の全ての国内大会にがんばれハンドボール10万人会の「パスカード」及び「ペアチケット」がご利用になれます。

詳報

第19回 男子世界選手権

写真提供：スポーツイベント社

2005年1月23日からアフリカ・チュニジアで開催された第19回世界選手権大会に日本男子は熊本での大会以来8年ぶりの出場を果たした。今号では参加した蒲生団長、松井監督、中川主将はじめ3名の選手の声をお届けいたします。（日本チームの戦いにつきましては前号に既報）

団長報告

強化本部長として臨む初めての国際大会

団長　蒲生 晴明（強化本部長・中部大学）

今回の世界選手権は、昨年2月カタールアジア予選で死闘の末、見事に勝ち抜いた結果、1997年熊本世界選手権から8年振りに出場した大会であった。チュニジアでは、大統領が自ら先頭に立ち、セキュリティーに万全を期す国家体制をとっていた。バス移動では、SPの護衛付で分刻みのスケジュールであった。国の威信をかけた大会であった。

日本は、予選リーグCグループでクロアチア（前回チャンピオン・オリンピック金メダル・今回準優勝）・スペイン（今回初優勝）・スウェーデン（元世界チャンピオン）・アルゼンチン（アメリカ大陸チャンピオン）・オーストラリア（オセアニア大陸チャンピオン）と強豪国の中でも、もっとも優勝に近い国が集まったグループに入った。予選突破を目標として、強化本部長として初めての事業であった。以下に要点を述べる。

日本代表選手団：方針と結果

- 「緊張とリラックス」→選手の自主性を尊重し、管理した。
- 少数精鋭で予選突破→フランスでの事前ゲーム（1勝2分1敗）終了後、2名を計画通り帰国させることによって、緊張感と競争心理は充分働いた。
- スタッフの効果的なサポート
  →協会スタッフの活躍によって、チームマネジメントをなんとか進められた。
  →分析担当者の協力によって、対戦相手の情報を客観的にまたビジュアルで表現することができ、チーム全体に良い影響があった。
  →ドクター・トレーナーの献身的なサポートによって大きなフィジカル面の問題はなかった。

結果に対する評価

- 97年熊本大会と同レベル2勝3敗：予選4位（今回から予選3位までが次のラウンド進出：前回ならば、次のラウンド進出）
- アメリカ大陸チャンピオン：アルゼンチンに勝利したことは、充分評価できる。
- 世界チャンピオンのクロアチアと前半は互角に渡り合った。
- 武器とする速攻は、守りきれなかったのでチャンスが少なかった。

世界の流れと今後の男子代表の強化

- 大型プレーヤーのスピードアップによる攻撃力のアップ
- DF戦術、OF戦術のバリエーションが豊富
- 選手層が厚い上、ゲーム中のプレーヤーの起用方法が巧み
- 若手の台頭で競技者の育成が進んでいる

今後の強化検討課題

- 世界の流れについて行ける様に、外国人コーチを起用し、ともに学ぶ
- 日本リーグ・大学などトップ指導者・トップコーチの育成
- 選手・コーチの海外留学と国際試合経験増加

以上要点を述べたが、今後の検討課題は新しいものではない。従来から抱えている課題であって、「人的・財政的」課題をクリアし、具体的に実現していくことが求められる。ハンドボール界の皆様のご理解とご協力によって実現し、念願である「北京オリンピック出場」を果たしていきたい。

監督報告

大会出場までの準備、大会から得た事、今後の課題

男子ナショナルチーム監督　松井 幸嗣（日本体育大学）

第19回男子世界選手権大会が、2005年1月23日から2月6日までチュニジアの首都チュニスをメイン会場として開催された。予選リーグで日本と同組のスペイン、クロアチアで決勝が行なわれ、スペインが40-34で勝利し、初優勝を飾った。3位はフランス、地元チュニジアが4位に入る健闘ぶりであった。日本の予選リーグでの結果については、機関誌3月号で速報として掲載されたが、ここでは大会出場までの準備、大会から得た事、今後の課題等について触れたいと思う。

大会までの準備

選手選考：昨年2月のアジア予選メンバー、8月のエジプト遠征メンバーによる4回の強化合宿、そして日本リーグ視察による選考を経て18名を決定し、年末・年始の国内直前合宿を行なう。更にフランスでの大会直前合宿終了後、16名に絞った。

国内直前合宿：8月のエジプト遠征以降、約4ヶ月のナショナル活動のブランク（実業団選手権、日本リーグ、全日本総合）があり、12月下旬、1月上旬の約10日間ほどの直前合宿であった。この10日間はナショナルチームとしてのOF・DF・速攻の基本的な戦術構想を練習課題とした合宿であった。

フランス直前合宿：大会直前の約一週間、フランスにおいてクラブチーム、カタールナショナルチームとトレーニングマッチを行ない、国内合宿での成果を試した。対戦したチームの身長の高さ、体格の大きさ、プレーのスピードなど、対応しなければならない課題を見つけ、本戦を想定しての試合形式に重点をおいて修正した。

大会から得た事

平成16年度男子ナショナルチーム強化方針は、〈目標〉・〈強化の考え方〉・〈目指す姿〉・〈強化施策〉などを掲げ、8年振りに出場する世界選手権でベスト8以上を目標として強化を行なってきた。そしてナショナルチームの基本戦術では、目標・チーム方針・基本戦術構想（OF、DF、闘争心）等を強化の中心とした。また、大会直前に行なったフランス合宿での反省、大会中は対戦相手チームの分析、日本チームの攻守における確認事項・綿密なミーティング等を行ない、大会に臨んだ。結果は、残念ながら2勝3敗で、本戦ラウンドに進むことが出来なかった。8年振りの世界大会出場を目の当たりにし、実際に肌で感じるとハンドボール競技の変遷の大きさに驚きを感じたことは否定できない。しかし、選手はそれぞれの役割を果たし、全力を出し切って戦ってくれた。

今大会を通じて感じたことは以下の通り。

- ハンドボール競技のスピード化。（一試合、両チーム合計で60～70点のハイスコアゲーム）
- スピード化を迎えたハンドボール競技の更なる醍醐味と面白さ。
- 対戦したチーム内のメンバーに力の差がなく、皆がエースプレーヤー的存在であったこと。
- 全てのチームにおいて高身長の選手でも走りきれるスピード対応が成されていたこと。
- 移動しながらのポジショニング、パス・ブロック、誰もが何時でもシュートを狙える攻撃をしていたこと。（どんな場面でも基本に忠実）
- 8年振りの世界大会出場に、国際試合経験の少なさを痛感したこと。
- 試合後に反省をし、修正して次の試合に臨んだが、活かしきれない試合もあったこと。
- フィジカル面・メンタル面において、不足している部分もあったこと。

今後の課題

世界のハンドボールに早急に対応し、問題点を克服していく必要がある。

- 強靭な精神力の強化。（メンタル面）
- 60分間フルに動けるだけの体力、外国人選手に当たり負けしない身体・筋力の強化。（フィジカル面）
- 国際試合を数多く経験し、「試合慣れ」する必要性。
- 各ポジションのプロフェッショナル選手の育成。
- 技術・戦術面において、試合中でも対戦チームに対して直ちに対応・修正できる柔軟性のある能力を養う必要性。
- レフェリーを味方につけるくらいの技量が不可欠。そして最後に機動力溢れるスピードハンドボールを強力に推進させ、日本チーム特有の技術・戦術を開発、強化していくことが必要であると強く感じた。

写真提供：スポーツイベント社

今回の世界選手権出場に際して日本協会、全国のサポーター、そして多くの方々のご支援・ご協力を賜り、活動出来まし

た事を心より厚くお礼申し上げます。

最後になりましたが、日本大使館の皆様、海外青年協力隊、シルバー協力隊、日本から遠く離れたC組予選リーグ開催地スファクスでの思いがけない現地人の皆々様の熱い大きな声援・応援が私の一生忘れられない宝となりました。本当にありがとうございました。

選手の声

常に世界で戦い続ける決意

ナショナルチーム主将　中川 善雄（大崎電気）

写真提供：スポーツイベント社

大会は1月23日が初戦と決定しており、国内の合宿は昨年末と年明けすぐの6日から大崎電気の施設で行われた。新しい全日本になり強化の時間が少なく、やはり短期間の合宿で、より内容の充実したものにしたいと、選手、スタッフそれぞれが意識していたと思う。チームの趣旨は「速攻」であったが、昨年のエジプト遠征において世界のオフェンス力を体感し、やはり「デイフェンス強化」が課題となり、年末、年明けの合宿はデイフェンスのトレーニングが中心となった。

大会が近づくにつれ、トレーニングの雰囲気も緊張感が増し、必然的にチームのモチベーションも上がった。そして大会直前のフランス遠征では、フランスのクラブチームやカタール代表とのエキシビジョンマッチを行い、国内でできなかった「実戦でのテスト」、要するに合宿でやってきた事を海外のチームに試すのが目的であった。やはり国内の相手ではなく外国人を相手にすると言う事は、大会前にいい意味でも、悪い意味でも成果があった。特に強化してきたデイフェンスにおいては、高い位置からシュート打ち込まれ、慌ててでるとポストと言う風に「悪循環」な部分も露呈され、必然的にそういった試合はDFの的を絞れないゲームになってしまった。逆に、DFが機能している時はトレーニングを積んできた速攻も1試合を通しての本数が多く、いいムードを作り上げた。ここででた課題をもとに大会直前までその修正と確認のトレーニングを積み初戦に備えた。

いよいよ大会に入り初戦は「スペイン」。このスペイン戦が個人的にこの大会を物語っていたと思う。それは色んな意味も含まれるが、例えば日本は4大会ぶりに世界の舞台に立ち、まずハンドボールの変化に戸惑ったと思う。ルールも違う気がした。結論から言うと、日本が予選を突破し、ベスト8以上の目標を掲げるのであれば、常に世界大会に出続けると言うのが最低限で、そしてアテネオリンピック前の時以上に海外を経験すべきだし、そして有望な選手は早くから海外に挑戦するべきだと思う。「人間は慣れる生き物」だと痛感しました。そして北京オリンピックを目指すにあたり、今までと一緒ではなく今まで以上の強化があり、システムがあり、協力がある必要があると思う。私達の使命は経験した事を、まずは自分に落とし込み、国内リーグに落とし込み、そしてナショナルチームのよき伝統に変えて行く事だと感じる。結果的に2勝3敗で予選突破できず、応援していただいたファンの皆さん、夢を持って応援してくれた子供達に対し、残念に思う。

最後になりましたが今大会に向け、ご協力、応援していただいた関係者の方々、チーム関係者、家族にお礼を申し上げます。

選手の声

アジアNo.1で北京に乗り込みたい

ナショナルチームGK　坪根 敏宏（湧永製薬）

写真提供：スポーツイベント社

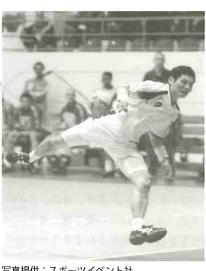
大会準備としては、DFから速攻につなげるスピードハンドボールに重点を置きました。やはり相手は国際経験が豊富ですので、色んな角度からでも攻撃をしてきます。やはり守れなければ簡単に得点することは難しい。ですが、日本はスピードがあるし、身長など関係なく簡単に得点できるとするならば速攻が一番ではないかと思いました。

大会中では、いきなりスペイン・クロアチアなど強力な国と対戦し、前半などは日本の持ち味の速攻などで得点は出来ますが、やはり戦い慣れたチームだけあって、ポイントを押さえ込まれると得点できずにズルズルと引き離されるパターンが出てしまった感じです。他のチームに対しても、始めが良く、途中からミスをしてしまい、追いつかれ、引き離されといった試合内容だったと思います。

課題としては、より多くの国際経験を積まなければ今後、対戦していく国には対抗出来ないと感じました。そして、もっと日本でもレベルの向上がなければアジアでも勝ち抜くことは難しいと思います。アジアNo.1で北京に乗り込みたいと思います。

選手の声

世界の強豪と戦う為に自分がどうあるべきか

ナショナルチームCP　松林 克明（大同特殊鋼）

写真提供：スポーツイベント社

2004年2月にカタールにてWCの切符を手にして以来、松井監督の下、「速攻」を主体としたチーム作りを国内での合宿において作り上げてきました。個人的には大同特殊鋼に入社して以来、左サイドとしてプレーしてきたわけですが04-05シーズンはチームの構成上ポストでプレーしていた為、一抹の不安は拭いきれないところでした。とは言っても人生の中で何度出られるか分らないWC本大会。心、技、体、頭の整理とサイドプレーヤーとして、ベストコンディションでパフォーマンスできるための調整だけは行ってきました。

日本チームは残念ながら2勝3敗で1次予選リーグ敗退となってしまいましたが、様々な経験を得ることができました。まず率直な感想は「ハンドボール感が変わった」これに尽きます。決勝のスコアが40-34。日本のハンドボールにおいてこのような戦績の試合があったでしょうか？　決勝に進出したチームは日本と同じグループだったスペイン、クロアチアです。両チームとも戦いましたが決してDFが悪いチームではありません。それより得点能力が優れていたということです。もちろん個人能力も高いことはさることながら、これは2つ目に感じたことにもなりますが「速攻・クイックスタート」が速い。自チームのボールになったら最も早くセンターラインまでに達しているサイド及びセンターバックの選手にパスを繋げ得点する。速攻の概念が変わったというかワンパス、ツーパスで得点するというのが世界の速攻です。

日本は8年ぶりのWC出場となったわけですが、やはり世界トップレベルと同じ場に立ち続けなければならないと思います。出場しなければそれだけ世界から遅れていく。アジアの小さい枠だけではなく、常に世界に視線を向けなければ強い日本になることはないと思います。個人的にはサイドシュートも100％成功しましたし、速攻でも十分通用し、自信はつきましたが、日本が勝利しないとその価値も半減してしまいます。今後は「世界の強豪と戦う為に自分がどうあるべきか」ということを考えてプレーしていきたいと思います。

地元主催者
地元中体連
の声

大会を終えて

大阪中学校体育連盟ハンドボール部専門委員長　逢阪 静男（大阪体育大学附属中学校）

はじめに

終業式を終えた12月25日～28日、13回目を迎えたJOCジュニアオリンピックカップハンドボール大会が大阪府堺市の金岡公園体育館、家原大池体育館を会場に開催されました。昨年度に引き続き、男子は九州、近畿、四国、北信越ブロックが、女子では九州、近畿、中国、東北ブロックでそれぞれ出場枠が増やされ、男女32チームが熱戦を繰り広げました。

今大会の一週間前に大阪府で初めての全日本総合選手権大会が開催され、大阪協会としても総力を挙げての取り組みでした。大きな直後の大会ではありましたが、13回目という安心感で準備を進めてきましたが、やはり大会直前になって準備不足や問題点も見つかり、バタバタした面もありました。

試合に先立ち開会式が行われ、前年度優勝の男子沖縄選抜、女子熊本選抜を先頭に各チームが堺市立浜寺中学校吹奏楽部の演奏のもと、きびきびとした行進で、男女32チームが勢揃いしました。その後各チームの指導者に対する講習会が持たれ、日本オリンピック委員会、日本ハンドボール協会より説明があり、参加者全員が熱意を持って取り組み予定時間を大幅に延長して行われました。

男子の部

試合の結果は男子Aブロックより夏の全国大会優勝のメンバーが中心の富山選抜が、またBブロックからは夏の全国大会準優勝のメンバーが含まれる大阪選抜が茨城選抜と大接戦の末勝ち上がりました。Cブロックからは地元堺選抜に熱い声援が注がれましたが、地力に勝る愛知選抜が沖縄選抜と大接戦の末､得失点の差で勝ち上がりました。Dブロックでは奈良選抜が近差の試合を制し、それぞれ準決勝に進出しました。

男子準決勝は大阪選抜対富山選抜で、前半大阪がリードしてそのまま広げるかと思われたが、富山も粘り強く食い下がり、逆転の未決勝へ。第2試合の愛知選抜対奈良選抜戦は、愛知が破壊力のある攻撃と、堅い守りで奈良を寄せつけず決勝に選出。決勝戦でも愛知選抜がチームワークの取れた攻撃と、堅い守りで富山選抜を下し四度目の優勝を果たしました。

女子の部

女子ではAブロックに地元堺選抜の、夏の全国大会2年連続優勝チームを中心に編成されており注目されましたが、怪我で欠場選手も出て熊本選抜が勝ち上がりました。Bブロックでは埼玉選抜が奈良選抜に圧勝。Cブロックでは愛知選抜が山口選抜に前半のリードをそのまま保ち勝利をおさめました。Dブロックは大分選抜が圧勝し、それぞれ準決勝に駒を進めました。

女子準決勝、熊本選抜対埼玉選抜は双方とも一歩も譲らず延長の末、埼玉選抜が決勝へ、大分選抜は増田選手を中心に得点を重ね愛知選抜を引き離し、それぞれ決勝へ駒を進めました。決勝戦では大分が主導権を握り試合を進め、埼玉も速攻とコンビプレーで追い上げたが、大分が前半のリードを守り､総合力に勝り二度目の優勝を果たしました。

個人表彰

個人表彰はオリンピック有望選手に、男子:茨城県選抜・信太弘樹、沖縄県選抜・今元勇輝、女子：奈良県選抜・宇野歩。最優勝選手に男子：愛知県選抜・金子拓磨、女子大分県選抜・増田寛那。優秀選手には男子：愛知県選抜・川添将典、土居良恵流、富山選抜・藤佑彌、沖縄県選抜・東江太輝、大阪府選抜・植垣貴志、奈良県選抜・石原裕、岐阜県選抜・中里栄二、女子は熊本県選抜・森川佳央里、宮下真紀、愛知県選抜・高橋薫乃、埼玉県選抜・樽井沙織、安斉早紀、大分県選抜・松本紗也香、平川愛里選手がそれぞれ選出されました。

終わりに

今大会を振り返ってみて、各都道府県、ブロックとも選抜チームを編成し、夏の全国大会には出場していない選手も多く参加していました。このため、夏の大会とは違った雰囲気の盛り上がりもあり、各ブロックのレベルアップにつながっているのではないかと思われます。また、この中から高校や大学の各大会、さらには世界選手権、オリンピックに出場して活躍できる選手に成長されますことを強く願っています。

開催者として第14回大会も､各チーム選手､役員の方々が十分な力を発揮されますような環境を作ってまいりたいと考えております。

最後にこの大会開催にあたりまして日本オリンピック委員会、日本ハンドボール協会をはじめ、関係各機関、協賛を頂きました各企業、学校また、役員、補助役員の皆様に年末で多忙な時期に絶大なるご協力、ご支援を頂き誠に有難うございました。

男子
優勝チーム
の声

みんなで勝ち取った栄光

愛知選抜（監督）：纐纈 充（名古屋市立御幸山中学校）

はじめに

中学生のチーム数が全国一多い愛知県、中学生競技人口もおそらく一番多いのではないかと思われます。それだけ多くの選手の中から選考することに、非常に苦労しました。できるだけ多くの子供達にチャンスを…と思いましたが、指導できる人数にも限界があるので、34名の候補選手から16名の選抜選手に絞りました。志の高い子供達は、最終選考に残れなくとも、最後まで共に練習に参加してくれました。また選抜選手たちも、試合に出れなくとも自分たちのために一緒に練習してくれるこのような仲間に対して感謝の気持ちをもって、共に生活してくれました。選手たちのこのような気持ちが、仲間の信頼感を生み、チームワークを強めていくことにつながったと思います。

また、練習を進めていく中で、本谷先生、鳥本先生、県内の指導者、協力して下さった高校の先生方や選手の励ましや支援がありました。おかげさまですばらしい成績をおさめることができました。誠にありがとうございました。

準決勝、そして決勝戦へ

大会の中で、一番印象に残った対戦は、引き分けた予選リーグの沖縄戦でした。この試合の直前に、活躍を期待していた主力選手が体調不良を訴え、急遽名古屋へ戻ることになりました。この時点で苦しい展開を覚悟していました。試合が始まれば、展開は愛知の持ち味を十分に生かしたゲームとなっているように私自身は感じていました。しかし、身体能力にたけている沖縄の選手の粘り強い頑張りもあり、チャンスを得点につなげられず、愛知のミスも多く発生したこともあり、結果としては思い通りではありませんでした。勝敗だけを考えると、胃の痛くなる試合展開でしたが、ハラハラドキドキするスポーツの醍醐味を味わうことができた試合であったと思います。ただ、この接戦を通して選手たちは、ひとまわり大きく成長してくれたと喜びを感じることができました。

その後の決勝トーナメントでは、名古屋へ戻った選手も診察・治療を終えて無事に合流することができ、スタッフ一同がイメージをしていたとおりのプレーを選手たちが見せてくれました。更に決勝戦では、夏の全国大会で優勝している氷見南部を含めた富山選抜との戦いで、自分たちのやってきたことを出しきることができました。練習してきた成果を出しきることは、大変困難な事であると考えています。その難しいことを成し遂げた選手、その選手に自信を持ってプレーできるようにと粘り強く指導にあたってくれたコーチ陣は、本当にすばらしい人達であると大会を終えてしみじみと感じているところです。

感謝、そして次に向けて

たくさんの指導者の方が日々ご苦労されて見える中、自分のような人間が優勝監督としてこのような光栄な立場に立たせていただけたこと、誠に感謝しております。

愛知県には、自分のような者ではなく、コーチ陣をはじめ、優秀な指導者が多くいます。その方々の指導により、多くの子供達がハンドボールをすることを楽しみ、ますます愛知のハンドが盛んになり、ハンドボール界に愛知からよい風を吹き込めるよう願っています。

チーム提供写真

男子
優勝チーム
の声

「愛知の名に恥じないプレー・態度をしよう！」「全中の借りをJOCで返そう！」「狙うのは、項点だけだぞ！」

愛知県選抜主将 土居 良恵流（名古屋市立御幸山中学校）

こんな纐纈監督の熱い言葉で今年の愛知県選抜の戦いが始まった。

チーム全員が打倒沖縄に燃えていた。沖縄戦の前、深見先生から、先輩達のためにも絶対に勝とう、思い切ってやってこいと言われ、試合に入った。予想通り序盤から一進一退の展開。試合終了のホイッスル…同点、得失点差でト

ーナメントに進めると聞き、喜んだ。すぐ、「君達の目標は沖縄に勝つ事じゃないだろう」と言われ、もう一回気を引き締めた。決勝の相手は富山。全中の借りを返すにはもってこい。全員で今まで何のために練習してきたかを確認して試合開始。愛知の強さを全国に見せつける事ができた。

今年の愛知県選抜の優勝は、選手18人・スタッフ・先輩方・応援してくださった方々で勝ちとったものだ。ありがとう!!!

女子優勝チームの声

選手に「ありがとう」を言いたい

大分県選抜女子監督 **藤下 雅士**（大分市立原川中学校コーチ）

8月、全国中学校大会の終了を合図に、大分県選抜チームは発足をしました。最初のミーティングで、このチームの目標を「九州そして全国制覇」であることを全員で確認しました。県内6校のチームから編成されたメンバーでもあり、チームの戦術として「DF重視、攻撃的なDFから相手のミスを誘い、速攻で勝負を決める」ことを徹底するために、韓国遠征を行い、また金・土・日の週3回は、大分鶴崎高校の胸を借り、チームの一層の団結と目標に向かう意識を高めました。

大会では、すべてが思い通り運んだわけではありませんでした。予選リーグ福井戦では後半猛攻にあい、決勝の埼玉戦でも、後半は優勝へのプレッシャーからDF、OFでもミスを連発した場面もありました。しかし、大会全体を振り返ってみると、ゲームを制した要因は、このチームが目指したDFからの速攻だったと言えます。また、苦しい場面でも選手たちが精神的にタフだったこともあげられます。優勝すると選手自身が大分を出発するとき宣言し、見事にやり遂げたことは、「やればできる」ということを自分たちの手で証明してくれました。

このような大きな舞台を与えてくれた大会関係者すべての皆様に感謝をするとともに、優勝できたのも、県・市はもちろん県協会、小・中各チームの指導者、高校の指導者や選手のみなさん、選手を全面的に支えてくれた父母会、その力が結集されたからだと感謝しています。この感謝の気持ちを忘れずに、小中一貫した指導を目指して選手たちとともに一つひとつ前進してがんばっていく所存です。そして、最後に、選手に「ありがとう」を言いたい。

女子優勝チームの声

「夢の全国制覇までの道程」

大分県選抜女子主将 **松本 紗也香**（大分市立明野中学校）

今年の大分県選抜は、8月下旬に結成され、チームとしての練習が本格的にスタートしたのは、9月の韓国への遠征でした。昨年に続き、強豪韓国との練習は涙が出るほどきつくつらかったのですが、最終日のゲームでは、韓国のチームに勝つことができました。このゲームは、私達に「やればできる」という自信を与えてくれました。このとき私たちは「絶対に全国制覇する」とみんなで確認することができました。

九州大会でも私たちの目指した「守って速攻」のハンドボールができ、優勝することができました。九州大会後も高校生の胸を借り、達成感のある練習を行うことができました。その中でわたしは「このチームなら全国優勝できる」と感じていました。

全国大会では、気の緩んだゲームもあり、監督・コーチから「これで悔いが残らないのか」、「自分たちがやってきたハンドをしよう」と言われ、準決勝・決勝は危ない場面もありましたが、自分たちのハンドボールができ優勝することができました。最後の大会で監督・コーチを胴上げできたことが一番の喜びです。大会では、わたしの「夢」を叶えることができました。これから、次の目標に向かってがんばりたいと思います。

最後に、監督・コーチ、そして練習をしてくださった鶴崎高校の先生・先輩方、わたしたちを支え応援してくださった保護者のみなさん、本当にありがとうございました。

チーム提供写真

NTS2004報告

NTSコーディネーター　栗山　雅倫

【あらたな局面へ】

NTS2004の全事業は、前回までにご報告申し上げましたとおり、お蔭様をもちまして無事終了いたしました。あらためて、ご理解、ご協力に感謝申し上げます。

さて、既にご承知のことと存じますが、NTS予算のバックボーンは「スポーツ振興くじ」の支援によるものです。数年来、toto売り上げの厳しい状況から予算縮小を余儀なくされ、自助努力への変革を鋭意進めております。日本ハンドボール協会では、この機会をポジティブに捉え、変化へのチャンスと捉えています。したがって、予算の切り盛りだけでなく、ベターなシステムへの改革を常日頃から意識いたしております。

そんな中、ここまでの強化の現状課題などを整理したところ、NTS対象選手、まさにこれから新しい進路をたどる選手の活動状況に、大きな障害があることが露呈してきました。具体例としては、高校3年生はNTSセンタートレーニング終了後、大会はもちろんのこと公式行事が無く、大学進学時もしくは入社時には、競技者としての体力を維持できていないということです。

ジュニア対象選手でもあるはずの選手たちの、このような環境は一刻も早い改善策が取られるべきことは、以前からささやかれていたことと思います。しかしながら、具体的には策がとられていませんでした。

今年度、行事の変更等により予算の都合がついたことも手伝い、この「空白の時間」への対処の試みとして、U23、U19の合同研修合宿の開催にこぎつけ、更に合宿は2回に分けて実施することが出来ました。合宿があったことで、選手のモチベーションの維持を図れたのか、フィットネス状況も上々で、年度明けに開催される大会にこれまでより良い状態で入れそうな雰囲気を予感させるものがあります。

また、指導するスタッフはジュニアスタッフをはじめ、強化に関わるスタッフを複数名招聘し、トップ指導者の研鑽も兼ねた実施を試みました。理由の一つとしては、代表各カテゴリースタッフのコンセンサスの強化が挙げられますが、他、大きい理由としては、新年度より国際大会のカテゴリー増加に伴い代表チームの再編に迫られる対処の一つです。チーム増加により一貫性の低下をまねくことは予測される障害です。そのような状況に陥る前に年代を超えた合宿を催し、代表スタッフが協力し合って指導するという機会をもつことを試みました。

他にも様々な課題、また、様々な対処法が考えられることと思います。それぞれ一長一短があり、なかなかベストの回答を得ることは出来ません。一方、ベストの答えを待って何もしないことは停滞を意味し、イコール後退の一途をたどることは容易に想像できます。ベターな対策を常にディスカッションし、皆様方のご意見を頂きながら様々な対策を今後も講じてまいりたい所存です。今後ともよろしくお願いいたします。

～鈴をつける妙案は…～

企画・広報委員
早川　文司

フリースロー
Free Throw

　昨今、やけに寂しさを感じる時がある。いら立つこともある。無性に気持ちが沈んでしまうことがある…。

　なぜ？　どうも「サッカー狂想曲」にその要因があるようだ。来年のドイツ・ワールドカップ（W杯）へ向けてアジア最終予選が続いている。Jリーグも始まった。日本列島が連日「サッカー」「サッカー」で沸き返っている感じさえする。とくに2月にあった北朝鮮戦でのメディアの過剰反応？ぶりには、ほとほとイヤになった。日本にはその話題しかないのかと勘違いさえするようでもあった。過激な行動で取材証を取り上げられた週刊誌もあったようだが、これも「熱しやすく、冷めやすい」国民性なのだろうか。

　こういえば、ひがみっぽくなるが、でも、少しは「ハンドボールに目を向けてよ」と言いたくもなろうというものだ。

　Jリーグは今シーズンから空白地帯だった四国に念願のクラブが誕生、全国的な広がりを見せた。また、草津温泉にもJクラブが誕生、温泉と連動したクラブづくりが注目を集めている。

　こうした地域の人々に支持されているJクラブは、他にも新潟や大分にもある。決して経営基盤は安定しているとまでは今のところいかないようだが、地域の支えを最大の武器として三位一体で育てようとの意識があるところがうらやましい。

　ハンドボール界も「地域重視」は欠かせない。「地域とともに歩む」ことは、今後の日本スポーツ界には避けて通れないことは明白だ。地域の人たちをどう取り込むか、さらに自治体とどのように連係してハンドボール競技を浸透させていくか。多くの課題はあろうが、これに最大限のパワーと知恵を注がないことには、明るい将来はなかろう。

　先に大阪で開かれた日本リーグGM研修会でも、ザスパ草津のクラブ運営について貴重な体験が披露されたと聞く。これらJクラブや文科省が推し進める総合型地域スポーツクラブなどから参考になる話を聞くのもいいだろう。要はいかに全国にハンドボールクラブを誕生させるかが重要なのである。

　すそ野を広げることは、人材発掘にもつながるし、ファン層拡大にも貢献できるだろう。どのように「首に鈴をつけるか」が最大のテーマである。関係者の英知を結集して妙案を出し、多くのクラブ誕生につなぎたいものである。

ヨーロッパの選手はいつ「トレーニング」するのか？

練習時間は１時間15分、１週間の練習回数は２回

選手を育てる方法や環境については今までいろいろな議論がされてきました。おそらく今後も永続的に行われていくものと思われますが、スウェーデンに渡ってから忙しく時間が過ぎる中で、時折感じることがあります。それは「彼らはいつトレーニングをつむのか？」ということです。私の長女の例を挙げてみましょう。昨年渡航後すぐに地元マルメのクラブチーム（Dalhems IF）に入ることが出来、現在ゲームとトレーニングに参加しています。練習時間は１時間15分、１週間の練習回数は２回、公式戦は２種類のエリアリーグとスウェーデン選手権（トーナメント）、大方土・日曜日に開催されます。スウェーデン選手権に関しては、勝ちあがればそれだけ試合が増えます。また各地で開催されるプライベートトーナメント出場しかりです。期間は９月から翌年４月までです。

ラルス・クリスチャンセン選手の場合

次にブンデスリーガ・フレンスブルグのラルス・クリスチャンセン選手のケースを参考にしてみましょう。シーズンは９月から翌年５月末までです。その間、ブンデスリーグ、ドイツ選手権、チャンピオンズリーグ、代表活動と休むまもなくスケジュールが入ってきます。練習時間は90分程度、午前中にフィジカルTrが入る時もあります。水曜日にチャンピオンズリーグやドイツ選手権、週末ブンデスリーガ、公式戦の次の日が休養日になりますから、一週間で３回の練習、２回の公式戦、もちろんホームゲームばかりではありませんからこの間に移動も含まれます。クリスチャンセン選手はデンマーク代表として世界選手権に出場しましたから、２月中旬までのスケジュールとなると、９月10月はシーズンスケジュール消化、11月の中旬ワールドカップにデンマーク代表として参加、翌年１月２日までシーズンスケジュール、その後世界選手権に向け３つ大会に出場し、本大会に臨み世界選手権終了後はフレンスブルグに戻り、上記のスケジュールを５月末まで消化します。

ゲームがトレーニング

日本との違いがわかるような比較表を作成するようなことはしませんが、我々が思っている以上にヨーロッパの選手はハンドボールをスタートした時から「ゲーム」中心に活動をしてきているということです。娘が出場する公式戦は必ず、レフェリー・オフィシャル・暖房入り体育館・父兄の応援含めた観客入りで行われます。フレンスブルグの公式戦は大方6000人（キールやハンブルグでは10000人）の観客を集め、常に「アドレナリン」が吹き出る状態で行われます。

トレーニングの合間にゲームが開催される日本と、ゲーム自体が選手のレベルアップに繋がる「トレーニング」であるヨーロッパ。地理的条件や体格のハンディばかりではなく、このあたりにも目を向ける必要がありそうです。だからと言って誰でも「ヨーロッパに移籍すれば」という偏った話にしないようにするのが、我々日本人コーチの「腕の見せ所」といったところでしょうか。

さてどうやって…？

SGフレンスブルグのホームゲームが開催されるCampushalleです。6000人収容可能。

デンマーク代表とSGフレンスブルグのキャプテンを務めるストリーガー選手の個人車。選手、監督も自らの車でクラブのPRに協力

SGフレンスブルグのHPに紹介された酒巻さん（HPより転載）

編集部より：酒巻清治さんの活動がブンデスリーグ、SGフレンスブルグのHPに紹介されました。

東京都協会だより

第21回読売旗争奪中学生 第19回読売杯争奪ちびっ子ハンドボール大会開催される

写真提供：プロフォート　サニー

表記大会が2004年12月26日～30日まで、中央大学第一体育会アリーナで開催された。同大会は東京都協会も後援で協力し、日本協会参与・佐野和夫氏が大会会長を務め、副会長・福本弘氏（都協会副会長）、大会委員長・大塚文夫氏（都協会理事長）、審判長・兼田佳博氏（都協会審判長）が役員として参加した。

佐野和夫氏の言葉。一つの体育館にこんなに人の集まる大会はない。５面のコートで同時に試合が行われ、2000人以上の選手、コーチ、保護者の方が同時に体育館にいたのではないか。昨年は体育館の都合で中学生のみの大会となり、多くのちびっ子チームからの開催要請があった。今年は中央大学のご理解で中学、ちびっ子の同時開催ができた。大会運営は大変であるが、次代を担う選手の熱戦の灯を消さぬよう、今後も主催、共催各社の協力を得て頑張っていきたい。

（主催:㈱AIスポーツプロダクト「ハンドボール７」､㈱エモックエンタープライズ）

山田永子のノルウェー研修日記②

ノルウェー女子ナショナルチーム 通常の活動とヨーロッパ選手権までの準備

▶ 通常の活動 ◀

今回はノルウェーの女子ナショナルチームの活動について紹介します。女子ナショナルチームは、16、17、19、シニアリクルート、シニアと分けられ、それぞれ毎月1回合宿を行っています。合宿の日数は3日から1週間程度。基本的に毎月行なわれますが、合宿がない月にはその代わりに1日だけミーティングをしています。合宿する場所は毎回異なりますが、オスロにあるオリンピックセンターが練習場所、宿泊施設、食堂など設備が整っている上、集合場所として便利なため頻繁に利用されています。

2005年2月は10～13日にオスロのオリンピックセンターで行なわれました。今回は16歳からシニアまですべてのチームが集まりました。いつも合同合宿をする訳ではないのですが、今回は16歳チームが国際大会を控えていることや、ヨーロッパカップなど国内リーグ以外の試合の関係でシニアリクルート、シニアの選手があまり集まることができなかったので合同に合宿を開催して、練習試合を中心に行なっていました。

合宿メニュー

1日目	
13:00	集合
14:00～16:00	体力測定＋速攻練習
17:00	夕食
18:00～19:30	技術テスト（課題を与えて選手を評価）
2日目	
8:45	朝食
10:00～12:00	練習試合
12:45	昼食
15:45～16:30	ミーティング
17:00～19:00	体力トレーニング
20:00	夕食
3日目	
8:45	朝食
10:00～12:00	ポジションごとトレーニング＋6対6
12:45	昼食
16:45	チャンピオンズリーグ（Nordstrand-Volgograd）
19:00	夕食＋交流会（それぞれのチームで芸だし10分）
4日目	
7:30	朝食
9:00～11:00	ディフェンストレーニング
解散	

▶ 選手層の厚さとカテゴリー間の交流 ◀

16歳以上であれば、その上の17歳～シニアの試合すべてに出ることが可能です。私が研修中のクラブチーム（BSK）にも16歳で17歳チーム、19歳チーム、リクルートの試合に出ている選手がいるのですが、実際には16歳と17歳の試合だけでも週3回あり、それに加えてナショナルの合宿、試合があります。スケジュールを調節しながら19歳やその他の試合に出ています。以前トップの試合にも出て活躍したと聞きました。選手の能力やモチベーションに合わせて試合数や参加するレベルを上手く調節することが出来れば、この制度は選手の可能性を伸ばすとても素晴らしい制度だと思います。

私見では、大体16歳は多少体格的に劣り、技術的にも差があると感じますが、17歳チームでは半数、19歳の選手はほとんどリクルートと見劣りしません。実際には19歳の選手は各クラブチームで19歳区分とエリート区分を兼ねて試合をしている選手であり、同じ土俵でハンドボールをしているため見劣りはしないのです。シニアがナショナルAだと考えると、シニアリクルートがナショナルB、19歳チームがナショナルC、沢山の選手がシニアチームの予備軍として時期を待っている、選手層の厚さを感じました。

▶ ナショナル監督の仕事 ◀

ノルウェーチーム監督の仕事に関して話を聞きましたが、シニアチームの監督は専属のナショナルチーム監督（彼女のNHFとの契約は2005年2月に更新され2009年の3月まで。）で、合宿時以外は選手とのコンタクト、クラブチームの試合を観戦、NOC（ノルウェーオリンピック協会）との調整、ハンドボール協会の強化担当として講習会を企画、講義をするなど忙しく活動されています。

▶ ヨーロッパ選手権前の準備 ◀

ヨーロッパ選手権の準備を見てみるとアテネのオリンピック予選が終わってから（ノルウェーは出場していないので、観戦のためにアテネ入りした）、10月4～6日、10月18日～21日と国内で合宿を行い、10月22～24日までドイツでドイツ、フランス、ロシアと試合をしています。11月22～28日にスポンサーの開催するモンベルリンゲンカップ（ノルウェー）でフランス、ロシア、クロアチアと3試合、そして12月1～7日までフランスで事前調整しました。その間に、オランダ、スペイン、フランスと3試合しています。直前のフランスでの試合、モルベルリンカップはTV放送があり、国内の注目度も高く、緊張感のある試合が展開されていました。このようにヨーロッパ選手権大会直前まで、精神的にも肉体的にも非常にタフな試合をしていました。

大会前に限らず、ヨーロッパの国々は頻繁に対抗戦をしています。2005年3月初めにはドイツでノルウェーとクロアチア、スペインの女子ナショナルチームが集って試合をします。地理的に日本が背負うハンディは大きいと思いますが、ビデオで見るだけではなく、実際に試合をして肌で感じる経験を増やす必要があると感じます。

▶ 男子世界選手権を終えて ◀

男子世界選手権中はハンド観戦用の特設会場がカフェに設けられ、外に出るのが好きなノルウェー人はハンドカフェに集まって試合観戦をしていました。試合後のクラブは興奮冷めやらぬ、少し火照っている感じで、「シェリングがこんなシュートをやっていた」「こんなアシストあったよね」と、話題はTVで見たスーパープレーの話で持ちきりです。TV中継で世界のNo.1を決める数々の試合を見て、仲間と「こんな感じだった？　いやっこんなふうだったっけ？」と体育館で実践する。他のチームの練習内容を見ていても、世界選手権で見たプレーを目標にしたもの（特にポストへのアシストの方法）などあちらこちらに世界選手権効果のようなものが見られました。こういった火照りの積み重ねが、後々大きな違いになると思います。TV放送の影響の大きさを痛感し、日本でより多くの人が、タイムリーに世界のトップレベルの試合を観戦できる環境が整うことを望みます。

（次号の山田永子のノルウェー研修日記は休載いたします。次回は6・7月合併号に掲載いたします。）

世界の女王・林五卿の提言 ㊦

日本が世界ではばたくために

現在、広島メイプルレッズの監督として活躍の世界のスーパースター林五卿さんにインタビューを先号に続いてお伝えいたします。3回にわたった連載も今回で最終回です。今回は彼女自身が世界で感じ取ってきたことをもとに、日本が世界ではばたくために何が必要かをお聞きしました。インタビューは本誌フリースローでお馴染み、ジャーナリスト早川文司氏です。

ここまで2回にわたってハンドボールとの出会い、苦しかった中・高校生時代、韓国ナショナルメンバー入り、世界一へのチャレンジ、そして頂点に立った喜び、日本の未来を担う人たち、指導者へのアドバイスなどを語ってもらった。

最後となる今回は、日本が今後、世界の舞台ではばたくためには何が足りないか、どうすべきか。北京オリンピックに出場するためのアドバイスなどを話してもらいたい。

まず、日本は先の男子世界選手権でも予選をクリアできなかった。世界、言い換えればヨーロッパ勢への対抗策から話してもらいたい。

林　バルセロナ・オリンピック前年の1991年、韓国体育大学2年生の夏休みだったと思う。恩師である鄭亨均監督（前中国代表監督）に教えられたことが、今でもはっきりと残っている。「韓国を含めてアジア勢はヨーロッパ勢に比べて小柄だ。彼らに追いつき、追い抜くためには倍の力とトレーニングが必要だ」実際、ヨーロッパ勢と戦ってみて、その言葉を実感できた。当たられたらすぐ倒れたりした。だから、先生のきびしいトレーニング、スパルタ練習が理解できた。ハンドボール以外のことに目を向けず『オリンピックで勝つ』という目標に向かっていけた。そしてバルセロナで金メダルを獲得することが出来た。

しかし、4年後のアトランタ・オリンピックでは銀メダルに終わった。なぜか？　確かに実力的には上だったと思う。でも、負けたことは事実。当時のメンバーはバルセロナのメンバーが残っていた。何か新鮮なものがなく、私を含めて気持ちの緩みが勝てなかった原因だったと思う。

昨年のアテネ・オリンピックも銀メダルだったが、やはり同じ感じがする。身体で感じないとダメ。何か足りないものがあるのだろう。

韓国のナショナルメンバーは1年間のほとんどを合宿生活中心とすることがある。しかし、日本のナショナルは1年間トータルで2、3カ月の合宿。これでは世界のトップになるのはむずかしい。最初にも言ったように、ヨーロッパ勢とは体格、体力的に劣っている。だからナショナル活動をもっと広げることが必要だと思う。リーグのスケジュールは半年間にもなる。その間にもナショナルの合宿を組むなどが大切。

出来る限りけが人を出さないためにも、冬場にウェートトレーニングや筋トレをしっかりして身体づくりに励み、春から本格活動できるようにする必要がある。そのためには国内の各種大会のスケジュールとの調整も大切。アテネ・オリンピック出場で私と呉（成玉＝広島メイプルレッズ）が韓国の合宿で1、2カ月間、ウェートや筋トレをしっかりしたから日本に帰ってもその効果が残っている。経験から言えること。日本の合宿は10日間くらいだが、もっと長期間、あるいは合宿の回数を増やす必要があろう。韓国があれだけやっても世界の壁はなかなか越えられないのだから…。

―日本も今は各カテゴリーが充実してきたが、そのあたりの効果も期待できるのでは。

林　システムが充実するのはいい。しかし、ナショナルメンバーの人選が大切だ。韓国のアテネメンバーにも20歳や高校生

アテネ表彰式　　写真提供：IHF

もいる。センスのいい選手がそろっている。でも、監督の指導だけではどうしてもむずかしいものがある。私と呉が入ってそうした若手の「見本」になれる。これが重要。私達のプレーを見て、マネをして、自分のものに出来るのではないだろうか。実際に目の前で見ることは若手には大きなプラスになる。

だからナショナルメンバー選考で14人を選ぶとする。試合に出るのは10人から12人くらい。あとの4、5人は今後のことを考えて若手を加えるべきだと思う。一挙にメンバーを入れ替えると、若手が根性などを含めて学ぶものがない。将来を考えて可能性の見えるナショナルを編成すべきではなかろうか。ベテランと一緒に練習して、身体で受け止めるチャンスがないと若手が育たない。

—日本と韓国を比べて、日本をどう見ているか。

林　センスのいい選手は日本にいっぱいいる。でも、ポジションごとにリードする選手が必要。まだ技術が足りないし、経験も不足している。1、2年間、専門的に徹底的に技術を伸ばし、経験を積ませると打倒韓国も可能だし、世界でもトップクラスになれると思う。

—ナショナル活動の方法の問題でもあるが…。

林　所属チームでは練習も限界がある。ナショナルでは練習内容もレベルが高い。それをじっくりやることが大切だし、強化にもっと本腰を入れて取り組むことも重要。ジュニアとの連係強化も欠かせない。そのためにはシステムをしっかり構築することが必要だ。

—北京オリンピック出場は日本の最重要課題といえるが、可能性は。

林　北京オリンピックうんぬんではなく、アジアでトップになることをまず考えるべきだろう。トップになれば自然と北京への道が開けてくるのだから。

そのトップになるための宿題として、個々やチームとしての分析や今の何倍もの練習をすることが重要だ。そして今がベストメンバー、ベストチームでなく、3年後にベストメンバーになる可能性のある選手を選んで、今後2年間鍛えることが大切だろう。

先ほども言ったように、そのメンバーも一挙に入れ替えるのでなく、何人かの「手本」となるベテラン選手を残して可能性のある選手と融合させることが重要。目の前のゲーム、勝敗に

アテネでのプレー　　写真提供：IHF

こだわるのでなく、身体づくりをしっかりして、技術を伸ばし、コンビネーション練習をこなすこと。そこでは視野を広く持つことが欠かせない。とにかく3年後に「勝てるチーム」づくりを目指すことが大切。そこで忘れてならないのが、言うまでもないが「みんなでナショナルをフォローする、支える」ことだろう。

—ところで、もしも林さんが日本のナショナルを指導すると仮定した場合、まずメンバー選考はどうする考えがあるのだろうか。

林　そんなことは考えたことはない。ナショナルチームに限ったことではないが、私がメンバーを選ぶ基準としていることを言わせてもらう。

先にも言ったが、まずメンバー構成は、ベテランと若手をミックスさせたい。とくに若手の選考は身体、ハンドボールの動きを見たい。そして理解力なども参考にしたい。そのためには1度だけでなく、何度か選考会を開きたい。

練習にあたっては個々の選手の特徴、人間性など私なりにしっかり理解するのはもちろん、チームワークの大切さ、さらには勝敗のきびしさを植え付けたい。

また、もしも大学生や高校生をメンバーに加えるなら、学生が参加しやすいようなスケジュールで合宿計画を立てたい。実業団の選手は学生に比べると集まりやすいのだから…。そうすることで合宿の効果が上がるし、戦力アップにもつながるのではないかと思う。

でも、これはあくまでも仮定の話。いつの場合でも私は勝つために全力を尽くすが、ナショナルの指導は自信がないし、考えてもいない。

第9回 アジア男子ジュニア選手権

報告

全日本男子U-19コーチ　滝川 一徳（茨城県立藤代紫水高等学校教諭）

今号では表記大会にコーチとして参加されました滝川一徳さんの報告を掲載いたします。大会結果と日本チームの戦いは本年1/2合併号（457号）に掲載済み、次号にはトレーナーの尾中祐二さんのフィジカルレポートを掲載いたします。

ジュニアナショナルチームに携わらせて頂き、２回目のアジア選手権に参加させて頂きました。コーチとして、今回のチームの強化経過において感じたこと、および、高校の指導者の立場から私見を述べさせて頂きます。

前回大会から

2002年の大会（タイ・バンコク）においては、アジアの大会運営の現状をまざまざと見せられました。中東勢に有利なレフェリーの意図的なゲームコントロールを目の当たりにし、当時チームを指導頂いたクリチェンコ氏が「２度と私はこんな大会に来ない。これはスポーツじゃない、オイルチャンピオンシップだ」と目に涙をため寂しそうに話していたことを覚えています。最後の結果が見えている大会にわざわざ強化してチームを参加させるべきなのか、玉村監督とも真剣に話し合いました。それでも参加しないのは逃げであり、GK志水（大体大）、岩永（筑波大）、東長濱（日体大）ら優秀なタレントが育っていったこの世代の選手には過酷な現状とは理解しつつ、将来のある選手に多くの経験を積ませることで、未来のナショナル選手を育成することが与えられた使命と話し、アジアの正常化に期待しながら新チームのスタートを切りました。

チーム戦術および強化のビジョン

我々指導者は、そのチームが持つ良い状態のイメージばかりでなく、最悪の事態でもこうできるというラインを想定してチーム作りをしていかなければならないと考えます。そのため玉村監督とも入念に話し合い、仮に前回の様な大会運営がなされるとするならば…という仮定のもとチーム戦術を練り、それに見合う選手をピックアップしました。

試合前に指示を出す滝川氏（チーム提供写真）

DFにおいては攻撃的なプレス防御体型をとることはレフェリーによってはリスクを背負わざるを得ないと判断し、６－０防御で大型選手をピックアップするとともに、６－０防御でありながら、ここ数年NTSでも取り組んで頂いた機動力のあるDFを敷くために、それができる選手も選考しました。さらに速攻の戦術は、現在の松井ジャパンの真骨頂である追いかけの速攻を柱にし、OFにおいては大型選手のディスタンスシュートに頼るのではなく、ボールを保持する前の動きやコンタクトプレー、テンポの変化を利用した連続性のある攻撃で確立よく得点をとるというスタンスにして強化致しました。さらに今回はチーム強化の柱の１つとしてフィジカル面の強化を推し進めてきました。また医科学委員会の西山先生を中心にサポートして頂きまして、選手は自分の体の生理的特徴や栄養状態を知ることができ、非常に恵まれた環境で合宿を行うことができました。

大会総括

このチームは吉田キャプテン（筑波大）を中心に、攻撃では海道（筑波大）、前里（早稲田大）らが我々の意図とする戦術をよく理解し、彼らにできる精一杯のパフォーマンスでチームを牽引していってくれました。東（日体大）、谷井（大体大）GK陣も闘志溢れるキーピングでピンチを再三救ってくれました。しかしながらDF面での核となる選手が出てこなかったことが今回の大きな敗因の１つであると考えます。

大会に臨む

大会に入り迎えた初戦、クウェートとの対戦は、我々スタッフそして選手もレフェリーのコントロールがあることを予想しながら臨んだわけですが、追いつけるチャンスに連続してラインクロスをとられる等、微妙な判定はある中、前回のような明らかなゲームコントロールは行われておらず、初戦を落としてしまったものの、この大会は思い切った勝負ができると感じておりました。（結局は大会終盤にきてからこの大会は前回大会のようにカタール・クウェートを中心とする中東勢に偏るのではなく、クウェートのみに偏っていることがわかったわけですが…。）

韓国戦で見えた課題

２戦目以降、予選リーグ突破にはもう１つも負けられない

試合をチーム一丸となって突破し、大学生に混じって参加した高校生３名の大活躍もあり、迎えた準決勝韓国戦、この試合に勝てば20年ぶりの世界大会に出場が決まるんだと選手達は歴史を変えるという意気込みで戦いに挑みました。前日に入念な韓国対策のトレーニングとミーティングを行い、その甲斐あってミスも今大会で一番少なく、やらせてはいけないと徹底したことは確実に守ることはできたものの、先にも述べた通り、特に中央を守ることのできる強いフィジカルを持ったディフェンダーが不在でありました。国内でしかも大学生のレベルでは大きさだけでも十分に守れることができても、重さとスピードを兼ね備えた外国のバックプレーヤー陣をはじいたり、コンタクトしたりすることの経験はこの大会が初めてだったと思います。初めて日の丸をつけ外国人と戦う選手達にとっては初めての経験であり、DFのある選手が大会終了後に「もっともっときちんとウエイトトレーニングをしておけばよかった」と言ったように、この時点でもうすでに敗戦が見えてしまっていたのかもしれません。前半８点のビハインドがありながら、後半必死で練習してきたクロスアタックをかけ、スピード溢れる速攻で連続得点し、後半戦だけをとれば勝利したことは評価できたものの、この年代であと１歩まできている韓国との差を縮めるには、やはりある程度体ができる高校生のうちからのフィジカルトレーニングに対する意識を高めるとともに大学１・２年生の継続したトレーニングも絶対に必要であると考えます。

イラン戦：速攻を封じられる

代表決定戦に敗れた日本は、３位決定戦であるイラン戦に臨みましたが、前日の韓国戦における日本の速攻を警戒したイランは徹底して日本のDFでのスタミナロスを狙いにきました。明らかに日本の中央DFのコンタクトの弱さを見抜いた徹底したカットインプレーでの得点を狙いにきたわけです。セットプレーで得点されては得意の速攻にもつなげることができません。イランは攻撃回数をできるだけ減らし日本の弱点をついてきました。

大会の反省および今後の課題

今大会、クウェート戦を除いては、レフェリーは公平であり、前回レフェリーにばかり目がいってしまい、十分な反省ができていなかったことを考えれば、今回は明らかに課題が多く出ており、また今後クウェートが主導権を握り続けた場合を考えるとこの年代の選手に世界を経験させるには、韓国に何としても勝つしかないと考えられます。またイランの台頭も見逃すことはできません。イランのコーチに今大会に至るまでの強化体制について話を聞くことができましたが、今の日本の与えられた厳しい条件の中で強化していかざるを得ない現状と比べると相当なハンデがあると感じました。

それならば、せめて所属チームでフィジカルトレーニングを十分に実施して頂き、２年間で５回弱しか強化合宿を行えない現状を考えれば、所属チームでのトレーニングの継続が

右端が滝川氏、左端は大川氏（副団長、高体連委員長）（チーム提供写真）

最も重要となるのではないかと考えます。私見であり、また本音でもありますが、やはりジュニアナショナルチームは同じ年代だけの集団であり、また大学での先輩・後輩の生活から離れて合宿にくることでどこかに甘えが生じ、毎回注意を促すものの、合宿初日から緊張感があるかといえばそうでないことが多々あります。

ジュニア層の強化のために

今後選手の意識を高めるには、私を含めたジュニア層の指導者がより多く現状を知り、日の丸をつけることがゴールではなく、やはりアジアで勝ち、そして世界で戦うことを目標にできる選手を発掘・育成していかなければならないと考えます。NTSとも連動しながらここまでくることができましたが、センタートレーニングへの参加指導者数を増やす手立てを考える等、常日頃から現場で指導されている先生方とのコミュニケーションを図る機会を増やさなければ、今のジュニアの抱える問題も十分に議論されぬまま、また次回を迎えるという同じことの繰り返しになるような気がしてなりません。

例えば、攻撃の１つの例ですが、私もこの仕事をさせて頂く以前は、外国人＝大きい＝上から打ち込んでくるという考えを持っていました。ところが他国の大きな選手はデータをとってもわかるように、ブレイクスルーでの得点が圧倒的に多いのです。日本の中では長身シューターとして通用している選手が、このレベルの大会に行くと確率よくディスタンスシュートを決めることはできません。なぜなら外国人の強い当たりや高さがあるために国内でプレーするように簡単に間合いを獲得したり、間を割ることができず、そこで攻撃が詰まるとイージーなシュートを高い外国選手の壁の上から打ってしまうからなのです。ナショナルチームレベルの豊富な海外経験者ならば、わかりきった話だと思いますが、ジュニアの選手には外国人との対戦を経験をさせない限り、いくら映像で見せたり、説明をしても実際に肌で感じなければトレーニング効果も半減してしまうと考えます。

経験こそ財産

外国人に対するプレーをイメージとしては理解できていても、フィジカルの重要性も分かってはいても、実際に大きな外国人とコンタクトするなど、戦ってみてはじめてわかるこ

とが多いのです。しかし、アジアを突破しこの年代で世界を経験させるには、その時点でもう遅いのです。負ける悔しさを経験させることも大切であるという考えもわかりますが、それよりも勝つ喜びを経験して次のカテゴリーに進んでこそ生きた経験になるものと確信します。しかしながら今のハンドボール界を取り巻く厳しい現状を理由にした負けが許される訳ではありません。ですから、せめてジュニアの年代の選手を現場で指導されている先生方でのディスカッションを行い、現場に還元するなど早急に今できることを行っていく必要があると思われます。また、ナショナルチームとの合同合宿等をして頂き、外国人と戦うために必要なことを身をもって教えて頂くことも、この世代の選手には必要なことではないかと考えます。

最後になりますが、常日頃からのたくさんの先生方の励ましや御指導に対しまして、深く感謝申し上げますとともに、今後とも温かい御指導を頂けますよう切にお願い申し上げまして報告とさせて頂きます。

集合写真（チーム提供写真）

個人データ

CP（シュート率）	クウェート	オマーン	インド	バングラ	タイペイ	韓　国	イラン	合　計	％
吉田（筑波大）	２／３	５／７	４／５	０／０	３／３	－	－	１４／１８	７８％
岸川（早稲田大）	０／４	４／８	３／６	０／０	４／６	４／１３	１／９	１６／４６	３５％
海道（筑波大）	５／６	１／１	４／４	１／１	５／５	１／６	０／３	１７／２６	６５％
服部（中部大）	０／１	５／１０	４／１３	５／８	０／６	４／１２	１／８	１９／５８	３３％
宮島（函館大）	３／７	２／３	４／５	９／１１	８／８	３／３	２／４	３１／４１	７６％
雲井（大同工大）	１／１	１／１	７／８	４／５	１／２	１／１	１／２	１６／２０	８０％
西山（大体大）	２／２	０／０	６／９	０／０	－	０／０	５／５	１３／１６	８１％
藤本（日体大）	０／１	３／４	３／５	－	１／２	３／３	０／０	１０／１５	６７％
前里（早稲田大）	４／１０	２／５	０／０	０／０	３／６	３／８	４／７	１６／３６	４４％
銘苅（筑波大）	０／０	１／３	０／０	０／０	７／１１	１／４	０／１	９／１９	４７％
染谷（伊奈高）	－	－	－	８／１０	２／２	５／６	０／２	１５／２０	７５％
小川（伊奈高）	５／５	３／３	４／５	３／５	４／４	４／５	１／１	２４／２８	８６％
棚原（興南高）	１／２	４／５	３／４	１２／１８	０／０	０／０	４／６	２４／３５	６９％
合計	２３／４２	３１／５０	４２／６４	４２／５６	３８／５５	２９／６１	１９／４８	２２４／３７８	５９％

GK（阻止率）	クウェート	オマーン	インド	バングラ	タイペイ	韓　国	イラン	合　計	％
東（日体大）	３／１２	１０／２２	１２／２１	１０／２１	７／１８	８／２１	１５／３０	６５／１４５	４５％
谷井（大体大）	８／１９	１３／２５	７／２６	９／１２	１９／３７	１１／２７	１０／２０	７７／１６６	４６％

選手団名簿

役　職	氏　名	所属先名
団　長	竹野　奉昭	（財）日本ハンドボール協会
副団長	大川　洋司	茨城県立鉾田第二高校
監　督	玉村　健次	（財）日本ハンドボール協会
コーチ	滝川　一徳	茨城県立藤代紫水高校
コーチ	矢内　浩	大崎電気工業㈱
ドクター	有田　忍	トッパングループ健康保険組合
トレーナー	尾中　祐二	トレーナーズフォーアスリート

氏　名	所属先名	身　長	体　重	出身校
東　直明	日本体育大学	184	83	千原台高
谷井　清二	大阪体育大学	191	107	岡山理大付属高
吉田　哲	筑波大学	174	70	瓊浦高
岸川　英誉	早稲田大学	186	87	國學院栃木高
海道　衛秀	筑波大学	174	64	氷見高
服部　広幸	中部大学	192	85	大垣工業高
宮島　竜二	函館大学	172	72	高岡向陵高
雲井　朋幸	大同工業大学	187	91	桑名工業高
西山　尚良	大阪体育大学	175	65	洛北高
今井　昭仁	福岡大学	188	77	久留米工大付属高
藤本　拓	日本体育大学	172	68	岩国工業高
前里　卓実	早稲田大学	181	74	興南高
銘苅　淳	筑波大学	182	84	那覇西高
染谷　雄輝	伊奈高校	170	68	けやき台中
小川　雄也	伊奈高校	186	84	けやき台中
棚原　良	興南高校	189	77	浦西中

スコアールーム

第13回JOCジュニアオリンピックカップ2004 ハンドボール大会

開催期日：平成16年12月26日(日)、27日(月)：予選リーグ、28日(火)：決勝トーナメント
会　　場：堺市家原大池体育館、堺市金岡公園体育館

【男子の部】

■順位
優　勝　愛知県選抜（愛知県は５年ぶり４回目の優勝）
準優勝　富山県選抜
３　位　奈良県選抜、大阪府選抜

■オリンピック有望選手
信太　弘樹　茨城県選抜（麻生中）
今元　勇輝　沖縄県選抜（小禄中）

■最優秀選手
金子　拓磨　愛知県選抜（笹島中）
川添　将典　愛知県選抜（汐路中）
土居　良恵　流愛知県選抜（御幸山中）
藤　　佑彌　富山県選抜（西条中）

■優秀選手
東江　太輝　沖縄県選抜（神森中）
植垣　貴志　大阪府選抜（大体大附中）
石原　裕奈　良県選抜（上中）
中里　栄二　岐阜県選抜（中山中）

■予選リーグ
▼Ａブロック
富山県　22（13－９、９－10）19　岐阜県
熊本県　25（11－10、14－13）23　岩手県
富山県　25（９－13、16－９）22　岩手県
岐阜県　24（12－10、12－13）23　熊本県
富山県　29（12－13、17－11）24　熊本県
岩手県　30（12－10、18－12）22　岐阜県
▼Ｂブロック
茨城県　36（17－７、19－７）14　香川県
大阪府　40（19－９、21－11）20　北海道
茨城県　38（21－11、17－12）23　北海道
大阪府　28（12－６、16－13）19　香川県
大阪府　28（15－13、13－14）27　茨城県
香川県　30（17－11、13－13）24　北海道
▼Ｃブロック
愛知県　38（21－１、17－３）４　堺（開催地）
沖縄県　25（13－11、12－13）24　石川県
愛知県　40（17－９、23－４）13　石川県
沖縄県　34（20－６、14－13）19　堺（開催地）
愛知県　18（10－９、８－９）18　沖縄県
石川県　28（14－11、14－10）21　堺（開催地）
▼Ｄブロック
奈良県　21（10－７、11－10）17　愛媛県
山口県　26（14－12、12－10）22　埼玉県
奈良県　24（12－13、12－９）22　山口県
愛媛県　21（９－12、12－８）20　埼玉県
奈良県　23（14－11、９－10）21　埼玉県
山口県　23（11－７、12－７）14　愛媛県

■準決勝
富山県　31（15－12、16－12）24　大阪府
愛知県　27（12－７、15－６）13　奈良県

■決勝戦
愛知県　32（15－５、17－７）12　富山県

【女子の部】

■順位
優　勝　大分県選抜（大分県は７年ぶり２回目の優勝）
準優勝　埼玉県選抜
３　位　愛知県選抜、熊本県選抜

■オリンピック有望選手
宇野　歩　奈良県選抜（大瀬中）

■最優秀選手
増田　寛那　大分県選抜（明野中）
森川佳央里　熊本県選抜（玉名中）
高橋　薫乃　愛知県選抜（宝神中）
宮下　真紀　熊本県選抜（都呂々中）

■優秀選手
樽井　沙織　埼玉県選抜（大増中）
安斉　早紀　埼玉県選抜（大増中）
松本　紗也　香大分県選抜（明野中）
平川　愛里　大分県選抜（原川中）

■予選リーグ
▼Ａブロック
堺（開催地）　33（14－２、19－３）５　福島県
熊本県　26（11－８、15－７）15　岐阜県
堺（開催地）　25（12－７、13－６）13　岐阜県
熊本県　31（14－６、17－９）15　福島県
熊本県　21（11－４、10－８）12　堺（開催地）
岐阜県　25（13－６、12－15）21　福島県
▼Ｂブロック
埼玉県　49（24－５、25－１）６　北海道
奈良県　25（13－９、12－７）16　岡山県
埼玉県　30（18－13、12－８）21　岡山県
奈良県　36（25－３、11－８）11　北海道
埼玉県　32（16－８、16－11）19　奈良県
岡山県　31（14－７、17－６）13　北海道
▼Ｃブロック
山口県　25（13－６、12－９）15　香川県
愛知県　21（８－９、13－10）19　東京都
山口県　35（16－11、19－12）23　東京都
愛知県　27（13－３、14－４）７　香川県
愛知県　20（10－６、10－10）16　山口県
東京都　30（13－16、17－11）27　香川県
▼Ｄブロック
大分県　46（22－５、24－10）15　岩手県
福井県　23（12－８、11－４）12　京都府
大分県　27（14－９、13－14）23　福井県
京都府　26（13－10、13－10）20　岩手県
大分県　25（９－６、16－４）10　京都府
福井県　29（15－８、14－８）16　岩手県

■準決勝
埼玉県　27（13－12、10－11）24　熊本県
（2－0延長2－1）
大分県　26（12－７、14－8）15　愛知県

■決勝戦
大分県　24（17－８、７－13）21　埼玉県

2005年 競技規則変更 第2報

平成17年3月9日
(財)日本ハンドボール協会
競技本部　審判部・競技運営部

国際ハンドボール連盟(IHF)においては、本年は4年ごとに実施される競技規則変更の年にあたり、従来の日程と同じく(2005年)8月1日から新競技規則を実施する予定となっています。昨年秋のIHF総会で採択された競技規則改正概要(11項目)をもとに、今はIHFの競技規則・審判委員会(PRC)で新競技規則書の編纂が進められつつある段階です。この11項目について、平成17年1月30日に全国審判長会議で説明し、その内容を資料文書(第1報：2月4日付)として配布いたしました。その後、IHF／PRCから修正を加えた文書が公表されましたので、この内容を第2報として以下にお知らせします。

わが国では大会年度の関係上、恒例としてIHFより8ヶ月遅れて翌年4月1日から新競技規則を実施してきました。しかし、国際舞台でのさらなる躍進を目指すナショナルチームにとって、新競技規則の実施の遅れがデメリットになるのは明らかです。一方、国内の諸大会では新競技規則の不徹底に起因する混乱を極力回避しなければなりません。このような諸般の事情を考慮した上で、国内においてもIHFと同じく本年8月1日から新競技規則を実施することが(財)日本ハンドボール協会(J.H.A.)常務理事会で決定されました。したがって、通例よりも特に今回は、正確かつ可及的速やかに新競技規則を全国に浸透させる必要があります。事実、全国各地では4月早々から新競技規則で実施される諸大会も多いようです。一方で、わが国のJ.H.A.新競技規則書の作成にあたってはIHF新競技規則書(7月上旬頃に発行か？)の内容を最終的に確認しなければならず、J.H.A.新競技規則書の発行は早くても本年の9月頃になりそうです。このような実情を踏まえ、今後もJ.H.A.ホームページをはじめ、いろいろな伝達媒体を活用して情報を全国に浸透させていきたいと考えています。皆様のご理解とご協力をよろしくお願いいたします。なお、資料文書(第1報)の内容に関してJ.H.A.審判部に寄せられた質問等については、同審判部からIHF／PRC委員長のChrister Ahl氏にE-mailで直接問い合わせ、その返答を下記資料の中に【注】として挿入しました。

誤解や混乱が生じないよう、第1報と同じ文言を申し添えておきますが、新競技規則の条文がIHFから公式に発表されたのではなくて、競技規則の主な変更点についての基本的な考え方と方向性が示されたものを情報として公開する、という点に特にご留意ください。

なお、IHF／PRCから公表された文書の前文には、この11項目以外にも、小さな内容の変更があると記載されています。

【第1報通達後に第2報が出されました。機関誌では最新情報をお伝えするために第1報は省略させていただきます。（機関誌委員会)】

1. 競技時間の終了後におけるフリースローの実施について

(延長戦も含めて）競技の前後半の終了時にフリースローを行う場合、交代が許されるのは攻撃側チームのプレーヤー1名のみであり、他の両チームのプレーヤーは誰も交代できない。さらに、攻撃側プレーヤーは（防御側プレーヤーと同様に）スローを行うプレーヤーから少なくとも3m離れなければならない

理由：競技時間の終了後のフリースローに際して、スローの実施までに狂言のような状態が長く続き、しかも実際に得点に結びつくことも少ない。これは競技の魅力をそぎ、苛立ちの種となっている。したがって、このようなスローを行う状況のスピードアップを図らなければならない。

解決策：遅延の原因のひとつは、ディフェンス壁を作るために、防御側チームが背のより高いプレーヤーを起用することにある。このような防御側プレーヤーの交代を禁止する一方で、（スローを行わせたいプレーヤーがベンチに控えている場合に）スローを行うチームに対しては1名のみの交代を許可する。防御側プレーヤーを惑わせようとして、スローを行うプレーヤーの周りに攻撃側プレーヤーが群がることも、遅延の一因となっている。結局のところ、ボールを所持できるのは1名のプレーヤーだけであり、さらに他の攻撃側プレーヤーはボールに関与していないので、このような攻撃側プレーヤーの行為も禁止する。

【注】この規定に対する違反はプレーヤーの不正交代に相当し、2分間退場が適用される。

2. 競技の中断に際して、タイムキーパーに時計を止める権限を与えること

(通常のケースとしてはチームタイムアウトや不正交代の場合であるが）タイムキーパー（またはTD）が笛を吹いたとき、レフェリーの合図や確認を待たずに、笛と同時に公示時計を止めなければならない。

理由：チームタイムアウトや不正交代のためにタイムキーパーが笛を吹いても、レフェリーやプレーヤーには笛の音が聞こえず、競技が続行されてしまうケースが時折見られる。このような場合では時計は進んだままになっているため、正しい競技時間の計測について混乱と物議をかもし出している。

解決策：タイムキーパーが笛を吹いて競技を中断したときは、タイムキーパーは笛と同時に公示時計を止める。本規定の目的は、オフィシャル席の笛が鳴った後はいかなるプレーも無効であるにもかかわらず、その合図がレフェリーに聞こえなかったために時計が動いたままになっているという状況を避けることにある。

3. プレーヤーを14名に増員すること

チームは14名までのプレーヤーで構成される。

理由：4年前、IHFの競技規定として「14名のプレーヤー」を認めることが決定されたが、競技規則書には明記されていなかった。しかし、各国協会の大多数は「治外法権」をうまく活用し、「14名のプレーヤー」を国内大会でも認めていることは明らかである。このように広く支持されている流れに対して逆らい続けるとするならば、IHFにはそれ相応の理由が必要なはずである。

解決策：IHF主催の大会や多くの国々での実情を考慮して、1チームのプレーヤーの最大数を12名から14名に増やすことにする。よって、基本となる競技規則を「14名のプレーヤーを認める」と変更する。

4. 記録用紙へのプレーヤーの未記入が判明した場合の適切な罰則

チーム責任者は、参加資格のあるプレーヤーだけがコートへの入場を許可されるという規定を順守しなければならない。この責務を果たさなかった場合、チーム責任者によるスポーツマンシップに反する行為とみなし、16：1d、16：3dおよび16：6bに則って段階的に罰則を適用する。

理由：記録用紙に記載されていないプレーヤーが出場していると分かった場合、当該プレーヤーの失格というあまりにも厳しく、かつ論議を呼ぶ罰則がこれまで適用されてきた。これはチーム管理上のミスであり、失格とすべき他の違反の根拠と比べても、この罰則はあまりにも重すぎる。さらに、ミスをしたのはチーム責任者であり、プレーヤーに罰則を適用するのは根本的に誤りである。プレーヤー各自が記録用紙に記載されていることを確認する必要はないはずである。

解決策：従来の競技規則では、記録用紙に記入されていないプレーヤーがコートに入場した場合は失格となっていた。しかし、チーム管理上のミスに対しては、より理にかなった罰則を事実上の管理責任者に適用するべきである。したがって、このようなケースに際してはスポーツマンシップに反する行為として、プレーヤーではなくてチーム責任者に対して罰則を適用し、失格ではなくて罰則を段階的に適用する。つまり、それ以前にチーム役員が他の理由でどのような罰則を適用されていたか否かによって、警告・2分間退場・失格のいずれかが適用されるということである。言い換えると、チーム役員がスポーツマンシップに反する行為を繰り返して既に2回も罰則（1回目は警告、2回目は2分間退場）を適用されているといった特殊なケースにおいては、失格が適用されるということである。同様に、提出したメンバー表に記載（試合登録）したチーム役員とプレーヤーしか交代地域に入ることができない、という規定を順守できなかった場合も、チーム責任者に段階罰を適用する。

5. ピアスの禁止

ピアスも、プレーヤーが身につけることを禁止する。

理由：他のプレーヤーに危険を及ぼす可能性のある物について、以前より競技規則条文に列挙してきた。より現代的なもの、すなわちピアスを「危険なもの」とみなすかどうかについて関心が高まってきたが、条文に記載されていない。これに関連するIHF某委員会の意見では、明らかに外から見えるピアス（すなわちユニホームの下や口の中に隠れていないもの）は、危険物として禁止しなければならないという。指輪やイヤリングの場合と同様に、ピアスも取り外すか適切に覆い隠さなければならないと思われる。

解決策：該当する条文の中にピアスについても明記する。他のプレーヤーを危険にさらすようなピアス、つまり「口の中やユニホームの下」に隠されていないピアスが問題である。突起のない指輪（フラットリング）や小さなイヤリングの場合と同様、外から見えるピアスについては、安全にテープで覆った場合に限り認められうる。

【注】口の中のピアスは許される。

6. タイミングが悪ければ、「軽微な」プッシングであっても危険行為となる場合

たとえ身体的衝撃の小さい軽微な違反であったとしても、無防備な相手の不意をつくタイミングで行われた場合は極めて危険であり、しかも重大な結果を招く可能性があることに留意すべきである。特に、プレーヤーがジャンプしている、または走っているときに、このような事象が起こりやすい。これは相手にとって危険そのものであり、一見軽微な身体接触であっても、失格が適切かどうか勘案しなければならない。

理由：競技規則 8：5 において、相手に危害を及ぼすような違反について列挙し、これに対しては失格としなければならないと明記している。従来、この条文では、力ずくで甚大な衝撃を与えるような違反（すなわち、強く押す、相手を殴る、足をひっかける、相手を床に引き落とす行為）について記載してきた。残念なことだが、プレーヤーの違反はだんだんと巧みになってきて、（特に、ジャンプしている、または走っている）相手が全く無防備でまさに不意を食らうような瞬間に、小さな衝撃ながらも決定的な打撃を与えるようになった。結果的に、わずかな身体接触によって、相手は受身の態勢を取れないまま床に落下することになる。このような違反行為は未然に防止しなければならず、したがって重い罰則の対象としなければならない。

解決策：失格となる危険行為に関して、条文では明らかに力ずくで粗暴な行為を中心に記載されている。しかし、（ジャンプしている、走っている、相手が見えなくて受身の態勢が取れない、というように）相手が無防備の状態であれば、与えた衝撃が相対的に小さくても、極めて危険な行為となる可能性がある。この内容を注釈として加筆する予定であり、プレーヤー／コーチやレフェリーに注意を喚起する。（もちろん、プレーヤー／コーチが倫理的で責任ある態度でプレーすることが先決であろう。）同様の理由により、競技規則 8：3 にも以下を追記する。

16：3【注】に示したように、特別な違反に対しては、プレーヤーが前もって警告となっていなくても、レフェリーはそのプレーヤーをすぐに退場（一発退場）とする権限を有している。押す、走って、またはジャンプして相手にぶつかる、といった違反のうち、怪我を誘発させる危険性のより高いものについては、特に一発退場とすべきである。

7. 各種スロー間の不一致を訂正

ゴールキーパースローを行ったゴールキーパーは、ボールが他のプレーヤーか（相手チームの）ゴールに触れるまで、再びボールに触れることはできない。

理由：フリースロー、7ｍスロー、スローインおよびスローオフに際して、スローを行ったプレーヤーは（他のプレーヤーがボールに触れる前であっても）相手チームのゴールに当たって跳ね返ってきたボールに触れることが許される、と条文に明記されている。この規則をゴールキーパースローにも適用していなかったのは、条文の単純なミスである。

解決策：ゴールキーパースローに際しても、スローを行ったゴールキーパーは（他のプレーヤーがボールに触れる前であっても）相手チームのゴールに当たって跳ね返ってきたボールに触れることが許されると変更し、条文の整合性を図る。

8. ボールが天井に当たった後の競技再開方法は、フリースローではなくスローイン

コート上方の付属設備や天井にボールが触れた場合にもスローインを与える。最後にボールに触れなかったチームがスローインを行う。

天井にボールが触れた後にスローインを行う場合、ボールが天井に触れた位置から近い方のサイドライン上の最も近い地点よりスローを行う。

理由：2001 年に競技規則を変更してレフェリースローを廃止し、ボールがコート上方の天井に触れた場合、最後にボールに触れなかったチームのフリースローによって競技を再開することにした。しかし、フリースローを行うチームが意図はないものの不当な利益を偶然に得てしまう（偶然にも不当に有利な位置から競技を再開することになる）、といったケースが散発しているようである。例えば、防御側プレーヤーが近くに誰もいない状況で、ゴール正面からフリースローを行うケースがある。

解決策：競技の再開方法をフリースローからスローインに変更し、ボールが天井に当たった場所から近い方のサイドライン上の最も近い地点よりスローを行うことにする。そうすれば、競技再開に向けて両チームは公平に準備態勢を取れるし、ボールが天井に触れてから競技再開までの遅れも生じない。

9. ゴールエリア内における違反の後は、ゴールキーパースローで競技を再開

ゴールエリア内における違反に対しては、ゴールキーパースローにより競技を再開する。

理由：攻撃側プレーヤーがゴールエリアに侵入し（あるいはゴールエリアの床についているボールに触れ）、相手チームにフリースローが与えられた場合、競技再開の遅れやスロー位置の修正といった、つまらない状況が生じている。つまり、ゴールキーパーがゴールエリア内でボールを所持している状況はよくあるのに、フリースローを行うためにゴールエリア際の特定位置（ポイント）に移動しなければならない、という状況である。より簡便な方法によって競技を再開することが望まれる。

解決策：単純化を目的として、ゴールエリアへの侵入というような違反に対してはゴールキーパースローで競技を再開することにする。すなわち、ゴールキーパーがゴールエリア内の任意の位置からスローを行うのである。

【注】前回の文書資料（第 1 報）で「ゴールキーパーはゴールエリア内からフリースローを行う」となっていたが、第 2 報で「ゴールキーパースローにより競技を再開する」と改められた。これにより、従来の方法（コートプレーヤーやゴールキーパーがゴールエリア際のポイントからスローを行って競技を再開すること）は認められないことが明らかになった。

10. 休憩時間中の違反に対しても、競技時間中と同じ方法で段階的に罰則を適用

休憩時間中の違反に対しても 2 分間退場（および追放）を適用できるよう変更する。

理由：かつて、ある種の罰則（特にコート上のプレーヤーの数が減らされることにつながるもの）は、競技時間中にコート内で生じた違反に対してのみ適用されていた。このような古い対処法については徐々に変更されてきている。例えば、現在ではベンチにいるプレーヤーに対して 2 分間退場とすることができるし、チーム役員に対しても 2 分間退場とすることができ、タイムアウト中やチームタイムアウト中でも通常どおり罰則が適用される。今や、一貫していない罰則適用の方法は、残りひとつだけとなった。すなわち、休憩時間中の罰則はイエローカードかレッドカードのいずれかしかない点である（前回の競技規則変更時には、この点にまで考えが及ばなかったのである）。これは、以前に規定されていたチーム役員への罰則の適用方法におけるジレンマと、まさに同じである。つまり、イエローカードを既に挙げている場合、レフェリーは一気に過酷なレッドカードへとエスカレートするか、それとも性急な行動を避けて「見て見ぬ振り」をするか、極端な処置方法しか選択できないのである。今回の規則変更で、休憩時間中の違反に対する両極端な処置方法のギャップを、うまく埋められるとよいであろう。

解決策：休憩時間中の違反に対しても、競技時間中の違反と同じシステムに則って判定すべきである。つまり、チーム役員（場合によってはプレーヤーも同じ）が既に警告となっているとき、レフェリー（ならびに TD）に（失格ではなくて）2 分間退場を適用する余地を与えるということである。

11. 7m スローの判定に際しては、状況を判断してタイムアウトを宣告

7m スローを判定したとき、レフェリーはタイムアウトを必ずしも取る必要はなく、状況を判断し、必要に応じてタイムアウトを取る。

理由：何年も前のことであるが、7ｍスローの判定に際して多大なる競技時間が浪費されていると判断され、必ずタイムアウトを取った方がより公平であろうということになった。しかし、このようなタイムアウトの多くは無意味であり、むしろ総競技時間の不要な延長を生み出したに過ぎないことが分かってきた。

解決策：ゴールキーパーが交代する場合や一方のチームが明らかに遅延させる場合など、タイムアウトを取る方が適切なケースはあるであろう。しかし、時間浪費の有無についてはレフェリーの常識的な判断に委ねることにし、7ｍスローの実施前に実質的な遅れが生じる場合と、時計が止まらなければ一方のチームが不当に不利益を明らかに被る場合に限って、タイムアウトを取ることになる。

平成16年度1月常務理事会

日　時：平成17年1月22日（土）
場　所：東京体育館　第3会議室
出席者：山下副会長、市原副会長、大西専務理事、常務理事3名、監事2名、事務局4名

山下副会長より年頭の挨拶の後、議事にはいる。

審議事項

1. 平成17年度事業計画（案）について
事業計画（案）が提示され、担当常務理事より説明がなされた。更に具体化させ再度各担当常務理事で検討し、1月中に事務局長宛提出する。

2. 平成17年度事業予算（案）について
資料により説明が成された。本案は強化を重点に編成。

3. 規定集について
前回理事会において配付した資料を評議員、理事会で検討、了解を得て4月に発行する。

4. 平成17年度スポーツ指導者海外研修事業等募集について
今年度の推薦は見送るとした。

5. 平成17年度専任コーチ、ジュニア強化コーチ人選について
専任コーチにはチェニジア世界選手権の結果を見て松井氏を、ジュニア強化コーチには蒲生氏、玉村氏を推薦する。

6. 2004ミズノスポーツメントール賞候補者推薦について
今年度の推薦は見送る。同賞に対する推薦候補者のリストを作成する。

7. 文科省スポーツ功労者頻彰・国際大会優秀者候補推薦について
今年度の推薦は見送る。同賞に対する推薦候補者のリストを作成する。

8. 2005ワールドゲームズビーチハンドボール参加について
IHFより表記大会の案内状が届き、担当参事に連絡を取り、出場意向を調査中。

9. 2006AHF選手権及び予選について
2006年のAHF大会開催希望の開催日リストが送付され、今後検討する。

10. タイハンドボール協会オープン選手権について
表記大会はプライベート大会であり日本協会としてはチームの派遣は行わない。チームの条件はないのでHPを通して全国に告知する。

11. 日体協新評議員選任について
来年度は日本協会も役員改選の年なので評議員会後に決定する。JOC評議員は会長を推薦。人選については専務理事に一任。

12. その他
評議員会は本来評議員会から協会運営の意見を会長が聞くので、会長のみが出席すればよいことになっているが、日本協会では慣例として常務理事も同席していた。今年度例年通りで、今後形式を検討する。

報告事項

1. 平成17年度スポーツ拠点づくり申請資料
表記事業について都道府県協会に打診したところ4件立候補があり、条件等を考慮し、日本協会として氷見市の全国中学生大会を推薦した。

2. 平成17年度登録について（登録業務必携案）
2月20日に各都道府県事務担当者会議を開催。来年度の大きな変更点は、国体関係で成年について「ふるさと選手」制度が導入され、そのため関連し登録用紙を一部変更。

3. 平成18年度登録証案（クラブニッポン・ポイントカード）について
登録証についてクラブニッポンカードの利用を検討。

4. 第4回技術委員会報告
表記委員会の記録が提出された。

5. ナショナルトレーニングセンター施設案
ナショナルトレーニングセンターにハンドボールコート2面取れる体育館が建設される。完成は北京オリンピックの前年。

6. 国民体育大会参加申込情報システム他アンケートについて
日体協では試みとして岡山大会より登録をウェブ上で行えるようにする。尚、原本は郵送する。アンケートに関しては担当常務理事が回答を行った。

7. 平成16年度スポーツコーチサミットについて
表記サミットが案内され、各セクションからの参加が要請された。

8. 大会結果
①第56回全日本総合選手権大会
②第13回JOCジュニアオリンピックカップ，2004
③第17回男子世界学生選手権・女子ユース、U19、U23名簿

9. 大会予定
①第19回男子世界選手権：本大会へは14名参加、2名は大会前に帰国。
②全日本実業団チャレンジ2005高知大会・

10. 平成16年度スポーツ安全協会普及委託
機関誌3月号に広告を掲載する。

11. がんばれハンドボール10万人会
資料により説明がなされた。

平成16年度審判部合同会議報告

日　時：平成17年1月29日（土）・30日（日）
場　所：国立スポーツ科学センター
出席者：競技部長・審判部長・審判審査指導委員・競技規則研究委員長・国際委員長・視聴覚委員長・日本リーグ審判委員長・総務委員長及び委員・各連盟審判部長・各ブロック審判部長

報告事項

①平成16年度の審判員の海外派遣実績

②トップレフェリー研修会に実施概要
③公認A・B級の審査結果報告
④JHAレフェリーコース前期9名の参加者の状況を報告
⑤各ブロック活動報告
⑥各連盟活動報告
⑧競技規則研究委員会報告
⑦日本リーグ審判員会より報告
⑨視聴覚委員会報告

審議事項

①平成16年度JHAレフェリーコース後期スケジュールについて

関東大学チームによるプレマッチをモデルにし、3月末に実施することを承認。

②平成16年度実業団チャレンジカップについて

開催地区の四国で8ペア選出した審判団を承認。

③平成16年度全国高校選抜大会について

勤務環境の関係で、予定した審判員のうち、2ペア参加できない状態になり、変更が承認。

④平成17年度事業計画と予算について

常務理事会に提出された事業計画並びに予算が資料にて示され、承認。

⑤平成17年度公認A・B級審判員審査について

・平成17年度上級審査申請者

A級19名申請　書類審査合格　19名
実技審査は、5月福岡県で行なわれる西日本学生大会とする。

B級57名申請　書類審査合格　50名
実技審査は各ブロック内で行なわれるブロック大会とする。

書類不合格者の中で、公式試合・全国大会・ブロック大会の分類に誤解が生じているため、書類にて分類を示す。都道府県内あるいはブロック内での周知徹底を要請。

⑥平成17年度全日本大会審判員割当及び日本リーグ審判員の推薦について

各都道府県からブロック審判長への推薦提出を2月15日、ブロック審判長から日本協会審判長への提出を3月10日までに完了。富山県氷見市で来年3月に開催される中学生大会が増えることの説明。

審判の選出方法は従来の選出方法を踏襲することで承認。

⑦平成17年度トップレフェリー研修会について

過去の実績と平成16年度の実績が資料で示され、平成17年度の研修会について検討。

⑧NTSブロックトレーニング時の審判講習会について

トップレフェリー研修会は軌道に乗ってきたが、底辺の資質向上を目指した審判講習会が手薄になってきた。予ねてから話題になっていたNTSブロックトレーニングを活用して講習会を開催する提案がなされた。受講者負担を出来うる限り軽減する努力をすることで承認。

⑨競技規則改正内容と実施時期について

資料と映像により解説、説明され、実施時期を平成17年8月1日とすることを通達。各地域への伝達は、1月30日の全国審判長会議及び各ブロック説明会に於いて徹底する。

⑩IHF/PRC発行の段階的罰則の映像について

視聴覚委員会にて日本語バージョンに編成した映像と、審判部の解説書を資料として、全映像を観察し質疑応答の後全国に説明伝達することを承認。

⑪その他

・「がんばれハンドボール10万人会」の現状を示した資料を基に、会員確保の努力の要請。
・IHFニュースを配布し、世界の現状を説明。
・平成16年度審判員登録状況の資料説明。

全国審判長会議

日　時：平成17年1月30日（日）
場　所：国立スポーツ科学センター
出席者：審判部長、副部長、審判審査指導委員、競技規則研究委員長、国際委員会委員長、視聴覚委員会委員長、日本リーグ審判員会委員長、審判総務委員、各ブロック審判部長、各連盟審判部長、各都道府県協会審判部長

内　容

①競技規則改正点の解説および実施時期について

資料と映像により解説説明し、実施時期を平成17年8月1日とすることを通達。各都道府県内に於いて、審判員及び指導者を対象とした伝達講習会を速やかに実施するよう通達。

②全国大会担当審判員、日本リーグ担当審判員について

はじめに、来年3月に富山県氷見市で約100チーム集まる中学生大会が新設されることの説明がなされた。

担当審判員の推薦は従来の選出方法を踏襲することを説明。

各都道府県からブロック審判長への推薦提出を2月15日まで、ブロック審判長から日本協会審判長への提出を3月10日までに完了。発表後転勤等で移動があった場合には速やかに連絡するよう協力を要請。

③NTSブロックトレーニング時の審判講習会について

トップレフェリー研修会は軌道に乗ってきたが、底辺の資質向上を目指した審判講習会が手薄になってきた。予ねてから話題になっていたNTSブロックトレーニングを活用して講習会を開催することを説明。経費節約の観点から、講師旅費を受講者で負担することを念頭においておくことを説明。

④IHF/PRC発行の段階的罰則の映像について

視聴覚委員会にて日本語バージョンに編成した映像と、審判部の解説書を資料として、全映像を観察し質疑応答の後、地元審判員並びにチーム指導者に説明伝達するよう要請。日本語に編集したDVDを各都道府県10部ずつ頒布。

⑤登録申請について

上級申請、終身審判員、年度登録について遺漏なきよう要請。

⑥その他

審判グッズの販売協力、がんばれハンドボール10万人会会員確保協力等の協力要請。

がんばれハンドボール10万人会「サポート会員」2月入会・継続会員

【山形】五島訓二　**【群馬】**関口晴久、永井栄子　**【神奈川】**中丸英一、田村修治、宜保　毅、宜保紀子　**【石川】**寺垣俊彦
【三重】池辺健二

【4月の行事予定】

【会議】……………………………………………………

4月2日(土)　常務理事会(東京)

【大会】……………………………………………………

4月7日(木)～11日(月)

第2回東アジアクラブ選手権(男女)(中国)

訂　正

3月号・世界学生特集の記事に誤りがありました。お詫びして訂正致します。
12月30日（木）個人得点：兼本1点　未記載
12月31日（金）試合結果：クロアチア（誤）→中国（正）
1月3日(月）試合結果：日本33（15—17、18—12）32　トルコ（誤）
↓
日本33（15—17、18—12）29　トルコ（正）
1月3日(月)個人得点：正しくは、岩永、門山、東長濱７点、猪妻５点、内田４点、武藤２点、兼本１点

HAND BALL CONTENTS Mar

（登録チームの購読料は登録料に含む）

高いグリップ力を実現！
ミカサの人工皮革ハンドボール

HVN300

検定球3号、人工皮革
男子(一般･大学･高校)

HVN200

検定球２号、人工皮革
女子(一般･大学･高校)・中学校

HVN300／HVN200の特徴

1 人工皮革
ソフトな触感と抜群のグリップ力を発揮するハンドボール専用の人工皮革

2 フォーム層
特殊フォームが衝撃をやわらげ、触感を向上させハンドリング性能が向上します

3 補強層
柔軟性と強度をあわせ持った特殊補強布が丸さとサイズを保ちます

4 ラバーチューブ
バルブ落下防止構造のラテックスチューブは、柔軟でリバウンド性能に優れます

1 人工皮革
2 フォーム層
3 補強層
4 ラバーチューブ

MIKASA
SPORTS EVERY DAY!

株式会社ミカサ 〒733-0002 広島市西区楠木町3-11-2 TEL.082-237-5145 FAX.082-238-1252 www.mikasasports.co.jp

(財)日本ハンドボール協会編
『ハンドボール』第四五九号
昭和四十年六月七日 第三種郵便物認可
平成十七年三月二十六日印刷
平成十七年四月一日発行
東京都渋谷区神南一ー一ー一
電話 代表 三四八一ー二三六一
振替 〇〇一二〇ー七ー一〇二九三
編集兼発行人 大西武三
定価 年間三三〇〇円